F・

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F・

【Nコード】

N5514N

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

人間達が太陽系を飛び出して移民を開始してからすでに数世紀、様々な娯楽が生まれては消えていった。レースカテゴリの主役は長らく宇宙空間にあったが、三十年前に立ち上がったロードレースが人々を熱狂させる。そして今期、ヤマト資本のプライベートチーム『フォーチュンベル』が、新人を擁して開幕3連勝を飾り、台風の目となって暴れまくっていた。銀河チャンピオンは目の前、最終戦の幕が今、人類発祥の地で上がるうとしている。 空想科学祭2010参加作品です

第1話 リタイアと最終戦（前書き）

本作は空想科学祭参加作品です。

九万字近くになる長編になると思いますが、いつもの短編とは少しばかりノリが違うと思います。

レースというジャンルを題材にした以外はさほど申し上げることもございませんが、一話では話の都合上英文が挟まります。英語が苦手な私は、当然のことながらエキサイト先生の助力をお願いしておりますので、不自然な点がありましたも笑って許して下さいませ。

第1話 リタイアと最終戦

『おおーっと、北嶋が止まっているうー！』

F.G.N
フジ銀河ネットの名物実況が絶叫を上げると同時に、タイヤバリア近くの砂地へとカメラが切り替わる。白煙は上がっていない。しかし見る者が見れば、その車台シャシーが僅かに傾いていることがわかるだろう。

『あー、左のフロントサスですね。ブレーキに耐え切れなかったんでしょ』

解説の島宮氏が冷ややかとも受け取れる冷静な分析を添える。画面上ではカウルの中央が大きく開き、ヘルメットを被った小柄な男性が姿を現す。黒地に青いラインの入った『カプトガニ』から現れる様は、さながら古代に想像されたUFOから人型の何かが現れ出でたような風情すらある。シユールというか、非現実的な光景だ。

『シーズン終盤に来てこのリタイアは痛過ぎるう！ 銀河最速フリーターの快進撃もここまでなのかあっ！』

『まだです。ここで決まることはありませんから、最終戦に期待しましょう』

『そう、そうですね。我々の希望はまだ潰えた訳ではありません。来る最終戦、人類発祥の地で行われる最終戦に、彼の大和魂が燃え上がることを期待しましょう！ あのカプトガニが、揺らめく陽炎を背景にチエツカーフラッグを舞わせる様を、我々は待っていますよ。頑張れフリーター！』

『やかましいわっ！』

手近にあったクッションを、まるで親の仇にでもぶつけるかのよくな勢いで壁に掛かった大型モニターへと叩き付ける。

『落ち着けよ、最速フリーター。自分に当たってるぞ』

冷静な指摘に画面へと視線を戻すなり、明らかに不貞腐れていることが分かる歩みを隠そうともしていない自分の姿が目飛び込ん

できた。愛用している黄色いヘルメットに赤いパイロットスーツが、放っている不機嫌のせいにかくすんで見える。その瞬間は悔しいばかりで何も頭に入ってこなかったが、こうして時間を置いて冷静になつてみると、その様は情けなく映る。こういう時こそ堂々として現実を受け止める人間こそ一流だと、かつて画面を見る側だった自分も思つたことだ。

「……なあ」

すでにトップ争いへと移行した画面を、さながら死んだ魚みtainな眼差しで眺めながら、銀河最速フリーターといういささか不名誉な異名を冠する北嶋聡は、相棒に向けて言葉を発した。

「結局、原因は何だったんだ？」

「疲労破壊だよ。解説が言つた通りさ。まあ、この一戦だけで蓄積したワケじゃないけどな」

一般レベルの機器では問題にもならないような傷や亀裂が原因となるのは、フォーミュラレースにおいて珍しい出来事ではない。過酷な環境を耐え抜く品質こそが、何よりも求められる競技だ。それでいながら実際のレースでは接触や路面の不確定要素に事欠かないのだから、メカニックを始めとした裏方にとっては頭の痛い話である。

「やっぱブレーキを酷使し過ぎたか……」

「仕方ないさ。そうしなければポイントは稼げない。そもそも、資本金に乏しいウチが交換を渋つた結果だからな。誰もお前のせいには出来ないさ」

「けど、ノーポイントは痛えよなー」

レースを終えて二十四時間が経過している。昂ぶっていた気持ちも次第に治まり、攻撃的な疑問に替わつて自嘲的な後悔が押し寄せる頃合だ。まだ若い彼に、そういった感情を自在にコントロールしろと要求するのは酷だろう。

「ずいぶん弱気だな？」

「だつてよー」

ソファに転がり天井を見詰める。何度も網膜に焼き付けた筈の白いタイルが、今は始めて見る色をして見える。自分でも自覚できるほど、彼は今落ち込んでいた。

手を伸ばせば届く所に、夢があつたのだ。今その右手を突き出し、ても、掴めるものは何一つない。

「幸い、リタイアしたとは言つても左のフロントサスペンション以外に損傷はない。何より次は最終戦だ。後のことを考えてパーツの温存を図る必要もなくなる。思う存分走つて決着を」

「コーヒー飲まな―い？」

不意にドアが開き、笑顔の少女が現れる。

「おう、飲む飲む」

先程までの落胆はどこへやら、バネ仕掛けの人形よろしく立ち上がった北嶋が、ドアの脇に立ってトレイを抱え持った少女を迎え入れる。銀河系でも有数のお嬢様学校に通っている彼女は、どんな場所においても我が校の名を背中に背負うものと心掛けるべしという校訓に従つて、今日も制服を着込んでいる。ベージュを基調としたブレザータイプの制服は、無骨で安全性重視の船内服ばかりの環境では眩しいほどに目立ちすぎる。スカートの丈が膝上なので落ち着いて見えるが、これがミニだったりしたら色々と問題である。

「スポンサーの娘さんを小間使いとは、監督も良い度胸ですね」

「違つよツクモさん、私が勝手にやってるの」

「そうでしたか。これは失礼」

部屋に入るなり飛んで来た少しばかり棘のある発言に、彼女は表情一つ変えることなく自然な素振りですべてに答えた。とはいえ彼女が鈍い訳ではない。レース戦術を組み立てて前線で指揮を振るう現場責任者であるツクモ ショーリ・ツクモの立場を理解しているばかりでなく、その人となりを探る程度に親しくもあつたからだ。元々は別の仕事をしてきたツクモをF1という舞台に引き上げたのは彼女である。当初、手を出し口を挟む彼女に対して反感を持つスタッフも少なくなかったが、今では誰もが認める一員である。実際、彼

女の果たす役割も決して小さくはない。

「あ、ビデオ見てたんだ。フジネット？」

「そうそう、この実況は相変わらず無駄に賑やかで疲れるわ」

盛大に激しく落胆されたことがやはりシヨックなのか、小さな溜め息を吐きながらテールブルに並べられたカップを持ち上げる。そんな北嶋を見て、硬さや渋さが表情から抜けていることを実感したのか、彼女は小さく微笑んだ。

「まあ名物実況だからね。人気あるらしいし」

「見る立場ならオレも笑ってたんだけどな。あと、あんなにヤマトヤマトうるさかったか？」

「それはホラ、ウチに期待してるってことですよ。ヤマト出身のドライバーは五年ぶりだっけ？ それが去年まで無名だったヤマト資本のチームから出て走ってるんだもん。そりゃ連呼もするって」

ヤマトは日本の資本がベースとなった日系人の多い惑星である。星間連絡流通の観点から見ると端に当たる惑星だが、宇宙開発に遅れたハンディキャップも今はないに等しい。文化のガラパゴスと称された和の心は、銀河という舞台に移っても健在である。その独自性からか、Only in Yamatoは一繋がりの単語として認識されている。

「それだけじゃありませんよ」

ツクモが静かに、しかし張りのある声で割って入る。

「地球時代のF1から数えても、大和民族のドライバーズチャンピオンは一人も居ません。しかもマシンはヤマト資本の設立五年目というまだまだ若いチームです。クォーターの私でも熱狂する人達の気持ちは理解できますよ」

「そうだよ。私だって純正ヤマトだったから好きになっただし」

「いや、朱里ちゃんはマシンが可愛いからって言ってたじゃん」

「そんな昔のことはもう忘れた！」

エヘンと無い胸を張って堂々と嘘を吐く。この明るさと過ぎるほどに前向きな思考回路こそ彼女 すずもあかり 鈴木朱里の真骨頂と誰もが認め

るところだ。愛嬌のある笑顔が周囲を和みの渦に巻き込む高校四年生である。ちなみに彼女の高校は五年制であり、決して落第したのではない。ただ、背と胸だけはどうにも成長が至らず、そういう意味では落第生と言われても反論できない19歳である。

「ところで朱里さん、他の方の様子は知っていますか？」

ここに居る二人ばかりでなく、スタッフ全員が彼女をファーストネームで呼ぶ。鈴木運輸というスポンサーの娘であるという扱いを、何よりも彼女が嫌っているためだ。

「うん、虎さんとウエイさんは富田さんの部屋で会議みたいなことしてたよ。来年のことを話してるみたいだったなー、アレは」

「気が早いな、オイ」

「そういう配慮があったからこそ、我々が今気兼ねなく走れているんだ。ありがたい話さ。それで、他の方達は？」

ドライバーの素直過ぎる発言に釘を刺してから、ツクモは続きを促す。

「片平さんはシン君と一緒にマシンを弄ってたよ。すぐ近くに佐藤さんもいたけど、違う仕事してるみたいだった」

「アイツはデータ解析だろ。いつものことだ」

北嶋のバツサリとした物言いに、ツクモは苦笑と共に頷いた。北嶋の思考はいつも短絡的で直情的だ。しかし同時に、それはかなりの確率で的確でもある。これも恐らくは彼の持つ資質なのだろうと、ツクモは密かに分析していた。

「あ、そうそう」

コーヒーを並べて質問にも応じ、ようやく自分の席を確保して人心地ついた鈴木が、ふと気付いたように声を上げる。

「あと五時間……じゃなくてももう四時間半後か、ワープホールに入るから、それまでに雑務は片付けておくようにって、富田さんから伝言があったよ」

「我々はビデオを鑑賞する程度しかすることもありませんが、片平さん達には伝えたのですか？」

「うん、もう言ってるよ」

「それにしても、次に寝て起きる頃には人類発祥の惑星^{ほし}か。いつかは行きたいとか思ってたけど、まさかこんな形で実現するとはね。人生ってのはわからんものだ」

すでに飲み終わったカップをテーブルに滑らせ、ソファにゴロリと横になる。中型^{ミドルクラス}とはいえ、さすがに運送屋の用意したキャラバン船だけあって、その乗り心地は重力圏と遜色が無い。むろん、名門といわれるチームの中には豪華客船も真つ青という規模のキャラバン船を所有している所もあるので、彼らだけが特別という訳でもなかったが。

「さっちゃん何だかオヤジ臭い」

「誰がオツサンだ。お前とはこの先ずつと五歳しか違わねーよ！」
「私まだ十代だもーん」

「くそつ、何かムカつく！ というか、いい加減『さっちゃん』とかいう呼び方やめろっ」

「いいじゃん。可愛いし」

「良くねーよ！」

「はいはい、そこまで」

パンパンと手を叩いて世間の注目を浴びるＦＩＤライバーとスポンサーの社長令嬢の間に割って入ったのは、金髪青目のクールガイである。ツクモにも四分の一ほど大和の血が受け継がれているが、外見からは全く窺うことが出来ない。周囲にはその容姿を羨ましいと口にする輩もいるが、子供の頃からヤマト文化の只中で育った彼としては、周囲に難なく溶け込める黒髪や黒目に何度と無く憧れたものだ。だから、彼へと注がれる四つの眼差しの内の二つ カラーコンタクトによって鮮やかに染まった朱里の赤い瞳は、好き嫌い以前に理解出来ないレベルの嗜好であった。

「止めるなよ、ツクモ。今日こそコイツの無礼な態度に一言物申してやらねば気が済まん」

「まあ、元気が出て何よりじゃないか。それに」

左手の親指を立て、未だにレースの中継を行っているモニターへと向ける。

「お前がいきり立つべき相手は、彼女ではなく奴らだろう？」

視線が鋭さを増した。そこに在るのは三人の男達、表彰台という地位を獲得した者のみに認められる勝利者インタビュ어의様子だった。『今日はマシンの調子も良くなかったし、優勝出来たのは正直言っ
てラッキーだったね。次は最後だし、楽しいレースにしたいものだ
よ』

流暢な英語が同時翻訳されてスピーカーを通る。その言葉は北嶋の耳をくぐって頭の中で再構築された後、そこに宿る感情や思惑すらも炙り出した。

「楽しいレースだと？」

馬鹿にしている、そう感じたらしい彼の奥歯がギリリと鳴る。

「そりゃ、勝って決められればさぞかし楽しいだろうな」

悔しいが、敗者に言えることは何も無い。どんな台詞も、勝利という説得力があつてこそである。そしてモニターは、更なる厳しい現実を遠慮なく表示してくれる。

『それでは、現在のドライバーズランキングです。ここまで辛うじてトップを守ってきた北嶋が、最終戦を前にまさかのリタイア、ノーポイントに終わりました。代わりに今シーズン低迷に喘いでいたマイケル・シュマックが、今期三度目の優勝で四位から一気にジャンプアップしてのポイントリーダーです』

レース中は酔っていたとすら思える実況のテンションも、落ち着いているというよりは落ち込んで聞こえる。

『現在現役最強と名高いマイケルだけに、ここ一番のレース運びはさすがの一言ですね。ですが、北嶋選手も追い抜かれたとはいえずポイント差の二位につけています。以下四位までは団子状態、五位のサリスにも可能性はありますから、誰が優勝するかは全く予想が出来ませんね』

冷静な島宮氏だけに、事実の響きは重い。北嶋は今年、ポイントリーダーを続けてきた。一時は優勝確実とまで言われたこともある。それが最終戦を前に陥落し、残すは一戦のみだ。運もある。流れもある。しかし実力というものを誰よりも痛感しているのは、誰でもない北嶋だった。

「くそ……」

何とかしなければならぬという意識はある。ない筈がない。

『最終戦の舞台は人類発祥の地、深淵の闇に輝くブルーダイヤ、我々人類の心の故郷である地球での開催となります。頑張れ北嶋っ。』

時給1200円が伊達ではないことを証明してくれ!』

「うるさいわっ!」

二度目のクツションボムが炸裂すると同時に、室内が笑いの渦に飲み込まれる。

兎にも角にも、F1に旋風を巻き起こした弱小チーム『フォーチヨンベル』の面々は、和やかな雰囲気を持続したまま太陽系へと乗り込んだのである。

時代が変わり、人類の居住地が深遠なる闇の向こう側に移った今でも、やはりモナコは金持ちの楽園である。歴代のF1レーサーがこよなく愛したこの地は、F1レーサー達に対してもフレンドリーである。F1という規格が立ち上がった時、いち早くの支持と支援を名乗り出たのが、このモナコ公国だった。地球での開催は毎年あるが、使用するサーキットの中にモンテカルロが入っていない年でも、モナコで何かしらの式典を行うのが恒例となっている。

そしてこの日、最終戦の予選を翌日に控えた開戦前夜、ドライバーとチーム監督を一堂に会してのセレモニーが行われていた。会場を行き来する無数のフォーマルウェア、値札を下げたら財布が幾つあっても足りなさそうな高級料理、ステージには恐らく有名なオーケストラであるう集団が喧騒の中で演奏している。

「ほえー」

間の抜けた顔で啞然としている北嶋にとって、ここは絵に描いた金持ちの集いそのままの世界だった。圧倒されるといつか、もはや現実感がない。もちろん彼とて一年間F.Iのドライバーとして色々な星系へと足を踏み入れ、初めての経験に戸惑いながらもこなしてきた人間である。セレモニーと呼ばれる式典にだって何度も参加している。最初は慣れなかったフォーマルな衣装を着ても、不自然な動きはかなり減っている筈だ。だが各星系での式典がフレンドリーな、良くも悪くもフロンティア的気質に溢れていたせいか、あまりフォーマルな印象を受けなかったこともあり、近所で行われるパーティの大きいバージョンくらいの認識になっていたようである。彼は今期初めて、自分が場違いな所に立っていると感じていた。

「はっ！」

ふと気付いて周囲を見渡すが、そこに目的の人物は見付からない。F.IはF.I時代と違い、英語を話せることが必須の条件ではない。彼の所属する『フォーチュンベル』は日本語の会話力が必須だし、他にも英語以外の言語を必須にしているチームは少なくなかった。それでも、複数のチームを渡り歩くことを考慮に入れている大半のドライバーは英語を含めた複数の言語を習得するのが普通である。彼のように日本語しか話せないドライバーは極めて稀な存在だ。

「おい、何をキョロキョロしてんだ？」

「あ、ルース発見！」

背後から声を掛けてきた黒人男性にダッシュで駆け寄り、袖をガシツと掴む。

「おいこら、何掴んでるんだよ」

「許せ。緊急事態だ」

「緊急事態？」

「監督とはぐれた」

「その何が緊急事態なんだよ。子供か、お前は」

激しい天然パーマと大きな黒目が特徴的な黒人ドライバー

ル

ース・ハミルは呆れたように肩を竦めた。その反応が気に入らなかつたのだらう。ハミルほどではないながらも自由にカールしている天然パーマを逆立て、数少ない特徴的なパーツである太い眉毛を吊り上げると、北嶋は空いている右手をブンブン振りながら口を開いた。

「七ヶ国語とかしゃべれるお前と一緒にするな！ 今のオレが英語とかで話し掛けられてみる。間違いなく顔面に一発入れて逃げるね」
「やめろ、アホ」

軽く罵りつつも、その表情には笑顔が窺える。シーズン前シーズン中と何度か顔を合わせて話をする機会があつたものの、所詮はライバルチームの人間だ。こんな風にリースを忘れて会話するのは、ずいぶんと久方ぶりである。

「ここにはマスコミも入ってない。端っこで大人しくしてれば話し掛けてなんぞこないさ。皆明日のことで頭が一杯だしな。それと、俺が話せるのは八ヶ国語だ」

「ウザッ！」

「ウザいとか言うな！ 振り切つて逃げるぞ」

「すまん。悪かった。もう思つてもウザいとか言わない」

「……まあいい。だがさつきも言つたように、ここは純粹な社交の場だ。端に居れば無理に話し掛けられるようなことはないさ。そもそも他人に気を配れるほどの余裕は誰にもない。わかつたらホラ、手を離して壁際で大人しくしてろ」

「何を言うか。それだとせっかくの高級料理が食べられなくなる」

「メンドクサイ奴だな、お前は。そのくらい我慢しろ」

そう言われて簡単に離してしまう北嶋ではない。生まれてから今まで裕福と縁のなかつた彼にとっては、今こそ千載一遇の好機なのだ。そもそも地球産の食材は小麦や米すら高級品である。ここに並んでいる料理など、今を逃せば一生食べられない可能性もある。

「ここで食べまくるのは、スゲー重要なことなんだ。まあイギリス人のお前にはわからんだろうがな」

「やかましいわ。ゲテモノ食いのジャップが」

生活の舞台が一つの惑星から一つの銀河系に移っても、こついつた国際ネタは何故か健在である。

「Hey! Do you enjoy it?」

睨み合う奇妙な二人組に、一人の男が声を掛ける。色の濃い白人という印象のオッサンだ。三十代半ばの筈だが、両側に派手なドレスを纏った女性二人を侍らせている様は、ドライバーというより趣味の悪い事業家という印象である。それでも相手に嫌味な印象を与えないのは、彼が先天的に有しているラテンの血によるものだろう。

「Of course. However, it is not you.」

ルースが流暢な、北嶋から言わせると聞き取りにくい英語で返す。

二人はしばし話した後、時計を見たオッサンが女性の肩を抱くようにして立ち去っていく。別れ際、北嶋にもわかるような発音でグッドラックと言い残し、陽気な笑い声と共に去っていった。

「相変わらず元気だねえ、あのオッサンは」

「ネルさん、何て言ってた?」

会話の内容が気になった北嶋が、ルースの肘を突付く。

「ジャップは嫌いだから地獄に落ちろと言ってた」

「嘔吐くなっ!」

繰り返した緩い左ストレートを鮮やかなスウェーバックでかわす。

「つかさ、何でこんな状況で翻訳機付けてないワケ?」

「仕方ないじゃん。スーツに気を取られて忘れてたんだよ。んなことより、ネルさんは何だつて?」

「言うほどのことでもないよ。明日は頑張ろうとか楽しもうとか、そんなことだ。あ、明日頑張るから今日は彼女達とこれでお別れだとも言ってたな」

「ホントにどうでも良い話をしてっただな、あのオッサン」

ネル・マイオールというドライバーは苦労人として知られている大ベテランである。現在も歴代最強と謳われるアルトニー・シルバ

や北嶋の父親といった一昔前のドライバーと張り合った経験を有する古参の一人でもある。年齢こそ十歳程度しか違わないが、その経験値は雲泥の差だ。ちなみに付け加えると、各開催地ごとに愛人が居ると噂される色ボケでもあり、抱いた女の数でも雲泥の差がある。「まあいいや。ネルさんはもういいから、とりあえず中央のテーブルにゴーだ」

「だから、一人で行けっの」

「そう言うなよ。友達だろ」

「ともっ……おいバカ、こんなところでそういう恥ずかしい発言するな！」

やっぱりイギリス人はツンデレだと、北嶋はいつも思う。

もっとも、彼が日本ではなくヤマト出身であるように、ルースの出身もイギリスではなくニューロンドン出身だ。

「いつも、仲良しですね。二人は」

そんなじゃれ合う二人に、背筋の伸びた白人男性が近付いてくる。「シュ、シュマックさん！」

「Nice to meet you! Mr. Schumac

h

背筋を伸ばし、敬礼でもしかなない勢いで応じる二人に、現ポイントリーダーのマイケル・シュマックは吹き出した。

「硬いですよ。私、怖いですか？」

「とんでもないっ」

「I respect you!」

二人とも完全に我を失っている。もっとも同じドライバー同士、普段はこれほど緊張したやり取りはしない。サーキットで出会えば軽口を叩くこともある。特に少し怪しいながら日本語を使ってくれるので、北嶋にとっては現場で会話することの多い相手の一人でもあった。しかしそうは言っても銀河チャンピオンに三回上り詰めた経験を持つ名実共に現役最高のドライバーであることは事実である。ルーキーの北嶋や二年目のハミルから見ると、纏っているオーラが

違つて見えるのも不思議なことではなかった。

「ところで二人は、昔からの友達ですか？」

という至つて普通の質問に、お互いを凝視する二人はようやく我に返る。

『腐れ縁です！』

そして綺麗にハモつた。

「H A H A H A H A H A ! 仲が良いのは事実のようですね。ただ、友人とはいえ明日は敵同士、二人とも良いレースを」

「はい、ありがとうございますっ」

「Thank you . Good luck , Michael」

片手を挙げて笑顔で立ち去る紳士の背中を、二人は呆然と見送つた。自分達も同じ舞台上で戦うドライバーであるという自覚はもちろんあるが、それでもシユマツクは役者が違う。結果がどうなるにしても、彼が偉大なドライバーであるという事実に一片の揺らぎもないのだ。そして現場に居る彼らは、その偉大さを間近で目の当たりにしている。敵として、これほどやりにくい相手は居なかった。

「……流石だな、あの人は」

ルースが溜め息と共に呟きを漏らす。

「ああ、相変わらず顔が長いな」

「待てコラ」

「いや、別に悪口じゃないぞ。あの長さはギネス級だと思う」

「お前なあ、そういうこと本人の前で言うなよ？ さすがのあの人も怒るんだからな。実際、チームメイトとは仲悪いらしいし」

シユマツクのチームメイトは素行の悪さと毒舌で有名である。

「と、スマン。ちょっと呼ばれた。悪いがここで待ってる」

「あ、ああ……」

曖昧に頷く北嶋を置いて、ハミルがステージの方へと近付いている。彼の進む先には小太りの男性が待っていた。北嶋にも見覚えがある。アレはハミルのチーム デニス・レーシングの監督だった。「というか、別に無理してオレに付き合っても良いんだがな」

アレだけ嫌がっていた割にしつかりと面倒を見てくれる辺り、ハミルという人物の人となりが分かるというものだ。思えばスクール時代もそうだった。成績を巡って張り合うことも多かったが、それ以上に互いを認めていたという実感がある。ただのやんちゃ坊主だったレーシングスクールのライバルが、今やF1という舞台で肩を並べて走っている。考えてみれば感慨深い話だ。

「Hey」

そんな懐かしい記憶に沈もうとしていた意識に、無粋なアルファベットが割って入る。その野太い声に思わず振り返った北嶋は、上から覆い被さってくるほどの巨体に半歩身を引いた。

「アンタは……」

精悍な顔立ちの白人男性だが、色の薄い茶髪と同色の瞳が感情を希薄に見せる。その上彫りが深いものだから、ただ立っているだけで異様な迫力を周囲に放っていた。

「I am your fan」

それだけを呟くように言い放つと、口元だけでニヤリと笑って背を向ける。どう見てもドライバーよりはマフィアの方が天職に思える風貌だが、これでも銀河チャンピオンになる権利を有するチャレンジャーの一人でもあった。とはいえポイント差から考えると、辛うじて小指一本がかかっているレベルだ。彼の銀河チャンピオンを予想しているのは、地元の評論家ですら極少数である。

「アイ、アム……ファン!？」

アンドレ・サリスの言葉に、北嶋は動揺する。彼は壊し屋と名高い男で、荒っぽいレース運びをすることで有名な男である。自分のマシンも他人のマシンもよく壊すことが知られている。そんな男に『お前のファンだ』と言われても、素直に喜べないのは無理からぬ話だろう。裏に何か抱えているのではないかと疑いたくもなる。

「まさか、体当たりとかしてこないだろうな……?」

「冗談と思いつつも、素直に笑うことが出来ない北嶋であった。

第2話 Quality

フォーミュラ・インフィニティ・グランプリというカテゴリが立ち上がって、すでに三十年近い時間が経過している。当時は宇宙空間を舞台にしたシャトルレース、あるいはヨットレースが盛んな時期で、今更地べたを這いずり回るレースカテゴリなど迫力に欠けると揶揄されていたものである。しかし現在、単調でドッグファイトにならない宇宙空間でのレースは衰退の一途を辿り、ごく一部の伝統競技を除いて存続の難しい局面にすら立たされている。むしろ、かつてF1やF0と言ったカテゴリも衰退によって終幕を迎えており、現在盛況であるからといってF1が安泰であるなどという保証はどこにもない。強いて言えば、現在の専門委員会コミッションであるFIA（Federation International of Automobile?table IAutomobile「星際自動車連盟」）の姿勢が技術向上と娯楽追求をバランス良く行っていることが、現在の成功を生んでいる原動力となっているのだろう。もちろん、宣伝費に莫大な投資をしていることが、顧客を取り込む大きな要因になっていることは言うまでもないが。

いずれにしても、現在のFIAは過去の成功と失敗を貪欲に吸収し、模索している組織であり、そのために世界規模で成功していたF1の競技モデルに準じている部分が数多く存在している。一周のラップタイムを競って出走時の順番を決める『予選決勝方式』も、その当時のシステムを参考にしていた。

「……何とか抜けたか」

続々と順位やタイムの表示されるモニタを睨みながら、ツクモが低い声で呟きを漏らす。思わしい状況でないのは、整った眉毛の間に寄っている皺の数を見ただけでもわかる。チャンピオンのかかっている最終戦、予選の順位が重要なのは言うまでもないことだ。

F1同様F1も、技術向上や時勢の変化に伴って競技ルール（レ

ギユレーション）を変えるのが伝統芸になっている。予選方法も変更されることが多かったが、ここ三年間は大きな変更もなく、『ノックアウト』方式で固定されていた。

登録台数33台の内、予備予選（シーズン前半は前年コンストラクターズポイントの下位4チーム、シーズン後半は前半同ポイントの下位4チームによって争われる）で脱落した3台を除いた30台で一度目の予選が行われ、18位までが二次予選へと駒を進める。その後二次で10台に絞られ、最終予選のタイムで出走順位が決められることになる。スティーティンググリッド

ちなみに北嶋のタイムは17位、何とか一次予選はぐり抜けたものの、二次予選を突破するには難しい局面だ。二次予選開始までのインターバルは約10分、マシンのセッティングを劇的に変えるには難しい。いや、仮にそれが可能な時間であったとしても、予選一発のタイムを押し上げるには至らないと、少なくともツクモは感じていた。

彼は近くに陣取っている無口なデータマン、佐藤拓也に細かな修正点を伝えると、ストウールから立ち上がってガレッジへと向かう。ここまで来たら頼りになるのはデータや策ではない。北嶋という人間の資質であることを、ツクモは分かっているのだ。時が過ぎ、人が地球という惑星から飛び出してからすでに数世紀、自動車は文字通り自動で動くことが社会では当たり前になっているが、それでもレースにおいて主役を張るのはドライバーである。細部における補佐的なプログラム制御はもちろん介入するが、決定的な操作と判断を人間が行うことに変わりはない。そしてそうである以上、人間の有する感情が勝敗を決することは珍しい話でもなかった。

「駄目だー、やっぱり地球だとあいつ等に分があるわ」
ヘルメットを外し、湿った天然パーマを掻き揚げながら北嶋が愚痴る。

「でも、二次予選には進みましたよ」
皆の雑用係、シン・中根なかねの差し出したタオルを受け取って、顔と

頭をガシガシと拭く。しかしいつもなら頭皮が傷付くのではないかと思える習慣に、その日は全く切れが見られなかった。

「ギリギリ過ぎる。セカンドグループと張り合うのがやっとだ」

「やっぱり、大気のせいですかねえ」

「どう考えてもそうだろ」

言いつつ、北嶋の視線が愛車、FB2-03へと注がれる。今までその特性に助けられていたが、今度はその特性こそが厄介な障害になっていった。とはいえ、そのことで恨み言など並べるつもりはないのだろう。通称『カブトガニ』と呼ばれる単純な流線型のマシンから視線を外した北嶋の眼差しには、後悔や落胆など見られなかった。

しかしながら、彼の反応は殊更珍しい物でも殊勝なものでもない環境や経緯を考慮すれば、むしろ当然のことだ。そもそもチームとして立ち上がって五年、F1という舞台に参戦してから三年という新参弱小チームが、開幕三連勝などという偉業を為し得たのは、間違いなくカブトガニの特殊な性能があったればこそである。ほとんどのチームが二台体制で臨む中、資金繰りの関係から一台のエントリーをしている彼らが、つい先日までポイントリーダーの座にあったことの方が、むしろ前代未聞の珍事なのである。

「それだけじゃないさ」

ピットウォールから到着したツクモが、ニヤリと笑いながら登場する。レース戦術家として現場を取り仕切る彼の言葉は、時として監督のそれよりも遥かに重い。

「ここモンテカルロは、かつての市街地コースに倣った造りになっている。コース幅が狭く、ストレートが極端に少ない。中低速メインのテクニカルサーキットだ。ウチのマシン向きのサーキットとは言えないだろう」

「わかってるさ、そんなことは」

「いや、お前はわかっていない」

ずいとい歩近づき、左手で熱気を取れていないマシンに触る。

「確かに予選の順位は軽視すべきことじゃない。だが、我々の目的はポールポジションを獲ることか？ 違う。決勝で表彰台の真ん中に立って、文句なく銀河チャンピオンを決めることだ。そのために絶対に避けなければならぬこと、それはリタイヤだと思わないか？」

「まあ、そりゃそうだ」

完走しただけでも一ポイントが加算されるが、リタイヤをすればそれすらも貰えない。

「まずは頭を冷やせ。このサーキットで無理をしてマシンに負担をかけて、結果として前回のようなトラブルを引き起こしたのでは元も子もないだろう。お前は、今のお前に出来るパフォーマンスを示せば良い。予選は、所詮予選だ」

「……そうだな。うん、わかった」

表情と肩から、余計な力が抜ける。その様子を見て安堵したのか、ツクモは笑顔で踵を返した。しかしそれも僅かな時間ではない。ピットロードを渡ってピットウォールに戻ってくる頃には、元の洗面が復活していた。ドライバーもマシンも、可能な限りの状態は維持している。それでもやはり、状況が思わしくないことは事実だった。

「ここでベストラップを競うのは、やはり不利か」

アスファルトの熱気を取り込んだ不快な風を浴び、ツクモは独りごちた。異星の風も散々浴びたが、この地の風はやはり独特だ。生まれてから数えるほどしか浴びていないというのに、今感じているような不快な熱風ですら、どこか肌に合うような感覚に陥る。やはりここは人類の発祥した惑星だと、明確な実感として脳裏に刻まれていた。

ふと気付いたように背後へ視線を巡らせると、ガレージから覗く様々な色をした鼻先　フロントウイングが並んでいる。あと数分もすれば、無機的な灰色のサーキットをカラフルに彩る筈だ。その光景は、かつて地球上のみで開催されていたF1と、さほど大きく

は違って見えないことだろう。

細かな仕様は技術の進歩もあって変貌を遂げているF1のマシンだが、その見た目は意外なほど変わっていない。密閉型コクピットやタイヤなどの支給部品、最低重量や限界全長などの制約はもちろん存在するが、取り立てて形を制限する規則はない。かつてF1がハイテク規制を始めとする画一化によって人気を後退させ、それが結果として消滅へ繋がったと分析されており、マシンの構造に選択の幅を持たせようというのが昨今の風潮である。しかしそれでも、限界を求める上での切磋琢磨は自然に方向性を収束させ、現在は可変ウイング全盛期と呼ばれている。いかに大気の流れを掴み利用するのか、それこそがチームの優劣を決していた。

しかし今期、正確には前期から始まっていたのだが、そういった空力競争と一線を画したマシンが台頭してきた。それがフォーチュンベルのFB2-03、通称『カプトガニ』である。このマシンはフロントウイングもリアウイングもない実にのっぺりした外観をしており、他のマシンとの差異は説明するまでもない。しかしそもそもどうしてこんな形をしているのかについては、少しばかり説明の必要があるだろう。

ポイントは二つ、ダウンフォースと慣性制御である。

ダウンフォースというのは路面との摩擦力を確保するために下へ押し付ける力のことで、F1マシンの場合は主にコーナーを曲がる時に必要とされている。速く走るための車になればなるほどウイングの必要性は増加するが、大きなウイングはコーナーをより高速で走るために必要ではあるものの、それは同時に直線における空気抵抗を生む。速い車＝直線速度の速い車と思いつい込み、大きなウイングがあるほど直線が速いと思うのは大きな間違いである。むしろ直線でのスピードを重視するなら、ウイングなど無いに越したことはないのだ。そのため、コーナーでウイングを立て（空気抵抗が上がりダウンフォースが大きくなる）直線ではウイングを寝かせる（空気抵抗が下がりダウンフォースが小さくなる）可変式のウイングが一

般的なのである。

では、もしもウイングが無ければどうなるのだろうか。確かに余計な抵抗を生む要素が無くなった分、直線は速くなる。しかし同時に、コーナーにおける旋回速度が遅くなる。旋回速度が落ちるということは、結果として直線での立ち上がりやコーナーに入るまでのブレーキタイミングに影響を及ぼし、タイムが落ちることになる。そこでフォーチュンベル、更に言えばツクモが目を付けたのが、コクピットのドライバーを守るために搭載されていた慣性制御装置である。Gコントローラーとも呼ばれるこの装置は、加減速の際に生じる縦Gやコーナーリングの際に生じる横Gを軽減するために存在している。簡単に言えば生じたGと反発するGを発生させているのだが、この機構を利用して下向きの力、つまりダウンフォースにしておまおうと考えたのである。とはいえ、これが説明するほど万能な装置ではなく、かなり大雑把なGのやり取りしか出来ない代物だった。元々ドライバーにかかるGを軽減できれば良いという程度が目的なので、細かな調整の出来ない装置だったのである。実際昨シーズンなどは、安定感が無い上に故障が多く、しかもコーナーであり効果を発揮しないという散々な結果に終わっている。他チームの中に追従して模索しようという動きもあるにはあったが、絹ごし豆腐を重機で食べるとすら表現された試みは、どのチームも割に合わないとアツサリ退いてしまった。

しかしそこは独自性と魔改造を得意とするヤマトの人間である。大雑把なGのやり取りをケースバイケースのプログラミング制御によって補い、一年間のデータ蓄積を経ることによって戦えるマシンへと昇華することに成功した。こうして現在、慣性制御装置を二つ搭載している世にも稀なF1マシンが、世間を賑わせているという事実へと繋がるのである。

実際、非力なエンジンであるにもかかわらず、直線速度で劣ったことはほとんどない。レース中のマックススピードは、3戦を除いて全てフォーチュンベルが記録している。その3戦とて、早期のり

タイヤがなければ彼らが更新していただろう。中低速のテクニカルセクションでも、上位チームには及ばないものの中堅チームとは互角の戦いが出来るレベルにある。コーナーは何か付いていき、直線で一気に追い抜くというスタイルのカブトガニは、決勝に強いマシンとして認知されていた。

「この好機は、何とか生かしたいものだな」

オクターブの高いエンジン音を響かせてピットロードを駆け抜ける色とりどりのマシンを横目に見ながら、ツクモは緊張した面持ちで呟きを口にする。

活躍を見せているとはいえ、彼らが弱小チームであるという事実に変わりはない。資金的にも体制的にも、名門や大手の比ではない。一歩リードした技術も追いつかれるのは当然のことだし、そもそも今回の活躍で慣性制御を利用したシステムに何らかの制約が設けられる可能性も低くない。来年もまた同様の活躍が出来る保証など、どこにもないのだ。

だからこそ、この最終戦は千載一遇の好機と位置付けている。恐らくチーム内で最も緊張しているのは、ドライバーの北嶋ではなくツクモの方だろう。

「おい、まだ出ないのかー？」

インカムを耳に当てるなり、最初の予選よりは幾分リラックスしたような北嶋の声が聞こえてくる。良い意味で単純なのが、北嶋の何よりも大きな長所だ。

「もう少し待って。こういうのはタイミングが大事なんだ」

不意に緩みそうになる頬の筋肉を引き締めて、フォーチュンベルの総合戦術監督は予選に臨む。ゆっくりと、だが確実に進む時間の中で、最良の結果を求めることは難しい。しかしそれが、彼に課せられた仕事だ。

結果、北嶋は最終予選にこそ進めなかったものの、12位というグリッドを手に入れた。不満はある。反省もある。だが同時に、まだまだ希望が見える順位であることも確かだった。

『お疲れ様でしたー!』

四人の声が重なり、グラスが涼しげな音を立てる。

「とりあえず、予選12位おめでとぅってことで」

「正直、祝杯を上げられるような順位じゃねーけどな」

鈴木朱里の言葉に、北嶋が苦笑いで応じる。優勝を目指そうというチームとしては、シングルグリッドは確保しておきたかったところだ。サーキットとの相性があるにしても、この順位で成功したとは言えない。

「それと、ちなみに言っとくと11位な」

「え、何で?」

「ハミルの奴がギアボックス交換で5グリッド降格でさ、アイツが12位。正直これはラッキー」

ギアボックスというのは変速機のこと、マシンをコントロールする上で極めて重要な装置であるが、構造上消耗が激しく、故障の多い部位でもある。

「そっか、一つでも上がって良かったね」

「いやいや、そんな単純な話じゃないんだぜ、お嬢さん」

右手の人差し指を横に振りながら、気障な仕草でシャンパンを流し込んで喉を潤す。

「明日のスタートがレコードラインになったんだ。これでシャンプアップも期待できる」

「レコードライン?」

スタッフの一員に名を連ね、何度かピット内でのレース観戦をしている朱里だが、レースそのものの認識は一般人と大差ない。むしろピット内で使われている機材の方が詳しいくらいだ。ちなみにレコードラインというのは、ライバル車などがない状態で走った際に通る場所のことであり、一般的に直線ではアウト側、コーナーではイン側となる。多く走られる路面というのは埃が少なく、タイヤの

糟が残留することによってグリップ力が増し、走りやすい環境になっ
ていることが多い。そのため、特に車間距離の狭いスタート時に
おいては、レコードラインから走り出す奇数列の方が優位になるこ
とが多かった。

「まあ、レースのことは一先ず置いておきましょうよ」

「オー！ シンが珍しくイイコト言ったねー」

「珍しくは余計ですよ、コウさん」

がはははと豪快に笑いながら、虎柄という派手過ぎるスーツに身
を包んだコウ・タイガーウッドが、すでに二杯目となったワインを
グビグビと飲み干す。名は体を現すとは言うが、茶髪に金色のメッ
シュまで入れるのは、流石にやりすぎだろうと誰もが思うところ
である。

「あんまり飲み過ぎないでくださいよ、虎さん」

「わかってマース！」

少しもわかっていないとしか思えない返事に、朱里は困ったよう
に溜め息を吐くものの、その表情に不安は見えない。何だかんだ言
って、このフォーチュンベルのスタッフは仕事熱心だと知っている
からだ。ちなみにコウは、こんな風に見えて慣性制御や重力制御の
専門家である。かつては重力エレベーターの設計技師だったことも
ある。

「ところで、ボクなんかに参加しちゃって良かったんですか？」

「どういう意味？」

朱里は小首を傾げた。

「だってこれ、北嶋さんのための食事会でしょ？ まだ片平さんも
仕事中的なのに、ボクなんかこんな豪華な料理を食べているだなんて、
良いのかなーって……」

「片平さんは何て？」

「いや、明日は大変だから、今の内に羽を伸ばしておけとか何とか
言われましたけど」

「なら、それで良いじゃない。それとも何？ 私のオゴリじゃ食べ

られないとか？」

「いえそんなっ」

意地悪く笑う朱里に、一つ年上のシンが慌てふためく。とはいえ、シン・中根はテストドライバーを兼ねる皆の雑用係だ。特にチームメカニックの片平に可愛がられている。その彼が片平を始めとした忙しそうに動き回るスタッフ達を差し置いて食事会に参加するとなれば、落ち着かない気持ちになったとしても責めることは出来ないだろう。

「シン、いくら気にしたって、明日のことは明日にしか出来ないんだ。とりあえずこのピザ食べ。スッゲー美味いぞ」

「いや、北嶋さんはそうでしょうけど……」

「お前だって明日は大変だぞ。どれだけこき使われるかわかったもんじゃねーんだ。わかったらそつちのナゲットこつちにくれ」

「そうデース。戦士には、休息が必要なデスヨ」

「いや、アンタはもう少し働いてくれ。今日の予選、前後のバランスが少し悪かったぞ。ちよつと前のめりになる感じがあった」

「人間前向きになるのが一番デース！」

がはははと笑いつつ、三杯目のワインもガブガブと喉に流し込む。一見すると駄目なオツチャンだが、こう見えて仕事はキツチリするものだから、なかなか侮れない男である。

「うーん……」

そんな会話を、朱里が眉間に皺など寄せて眺めている。

「どうした？ お前のオゴリなんだから、好きなもん注文しろよ。」

この状況でパフェとか頼んでも怒らないぞ？」

「誰が食い物で悩んでるんだコラ」

「だったら何だよ。まさか、一人二枚の計算だったピザを三枚食ったことを怒ってんのかっ？」

「違っつて」

こういふ会話をすると、余計に彼女の謎は深まる。

「あのさあ、アンタって時給1200円じゃない？」

「不本意ながらな」

車に乗るバイトと誘われて、まさかF1のマシンに乗せられるとは思ってもみなかった北嶋である。当時電動単車でメッセンジャーを自給10000円でしていた彼は、富田に突然スカウトされて200円アップという条件提示に喜び勇んでサインしてしまったのだ。

どれだけアホだったんだと、少なくとも百回は記憶の中の自分を叱りつけたものである。

「チームにお金ないから安く済ませようってのは当然だし、馬鹿なアンタがアツサリ引っ掛かっちゃったことにも納得できるんだけど

」

ナゲットを頼張る北嶋の眉間に、不快感を示す縦皺が寄る。

「いくら何だって、その辺に転がってる素人に出来ることじゃないでしょ、F1ドライバーってさ。でも今のアンタは、少なくとも私の目にはまともなF1ドライバーに見えるし、結果だつてちゃんと出してる。優秀なメッセンジャーだったってのは知ってるけど、それだけが理由なの？」

「いや、それだけじゃない。オレも後から聞いたんだけど、監督にオレを推薦した奴がいるらしい」

「それってツクモさん？」

「いや、ハミル」

「ハミルって……え、ルース・ハミルのこと？ デニス・レーシングのハミル？」

「そう、そのハミルだ」

そう言つて、北嶋は苦笑しく笑う。

「アイツとはスクール時代の同期でさ。試験ではいつも一番を争ってた。まあ、勝率はオレの方が上回ってたけどな」

ちなみにハミルも、少しだけ自分の方が勝っていると思っているらしい。更に付け加えるなら、公式記録のみを並べた場合、二人の勝率はキツチリ五分五分である。

「ちょ、ちょっと待って。スクールって何？」

「ドライバーやっててスクールって言ったたら、ヤマトドライバーズアカデミーに決まってるだろ。オレもハミルも、その生徒だったんだよ。まあ、オレは中退してるんだけどな」

ドライバーズアカデミーというのは、FIAによるドライバーの安定供給を目的とする育成プログラムの一つである。ヤマト以外にも20の惑星で開校しており、自宅にサーキットを有しているような大富豪でもない限り、大抵のドライバーはアカデミーを卒業することになる。かつてF1において、コネクションやスポンサー力ばかりがドライバーの条件となった時代があり、その反省を踏まえ、より多くの才能を発掘しようというのが、そもそもの始まりとなっている。

「そうだったんですか。やっぱりスクールの生徒だったんですね。初めて聞きました」

同じくスクールに通っていたシンが、その細い目の奥で瞳を輝かせる。

「でも中退って？」

「ああ、15の時に両親が交通事故で死んじゃってな。それなりに蓄えはあったから、スクールに通うことは出来ただけど、正直あの頃は、車に乗りたいとも思えなくなっただけな」

「あ……ゴメン」

珍しく殊勝な面持ちで、朱里は素直に頭を下げる。

「気にすんなって。オレは今こうしてF1のドライバーやってるんだし、そのことを喜んでるんだ。むしろ感謝しなきゃな。やっぱり、男は夢に向かっている時が一番楽しいと思うね！」

「夢？」

「アルトニー・シルバって知ってるか？ 今でも最速と色んな人が認めている伝説のドライバーだ。オレはあの人の走りを見て、ドライバーやってみたいって思ったんだ。途中で諦めて、もういいやつて思ってたけど、こうして追いかけて始めると、やっぱり身体が疼くんだよな」

「オウ！ シルバ最高デース！」

三十代のコウにとっては、リアルタイムに見たヒーローの一人であろう。走れば伝説になると言われるほど、多くのエピソードを残しているドライバーである。銀河中にまだまだファンも多い。

「聞いたことはある気がするけど、私は良く知らないな。でもそんな理由でアツサリスクールに通わせてくれたんだから、良いご両親だったんだね」

感心する朱里に、パタパタと左手を振る。

「いやいや、当時は親父もＦＩドライバーでさ。一応ライバルだから、あんまり誉めると怒られたんだよな。だから、表向きは親父の後を継ぐためってことになってる」

「え、アンタのお父さんってＦＩドライバーだったの？」

「あれ、言っただけだったっけ？」

「聞いてません」

「ボク知ってますよ。北嶋一志きたしまかずしですよね？」

シンが割って入る。

「ああ、交通事故があったから、結局一年ちよつとしかＦＩには出てなかったけどな。チームも弱かったから、あんまり目立ってなかったし」

當時を思い出す北嶋の表情に、憂いの色はない。

だが、明日には銀河チャンピオンが決まるという局面で、何も思わないなどということは有り得ないだろう。コウの父親が設計士であったように、シンの父親がシャトルレーサーであったように、母親の母校に朱里が通っているように、何かしらの繋がりを持って現在という時間は成立している。だがそれは、繰り返すためにあるのではない。むしろ越えられなかった壁を越えるために、達成できなかった目標を掴むために、未来という時間が存在しているのだと思うべきだ。

過去を振り返るのは構わない。だが北嶋は、もう過去には囚われないと決めた。

予選とは、スタートラインのポジションを決めるためのものである。過去はどうか、未来のチェッカーフラッグはまだ振られていない。スタートする位置が前でも後ろでも、チャンスはあるのだ。決勝とは、そのためにある。

第3話 ブラックアウト（前書き）

話の都合上、専門用語はもちろん、レース上必要な固有名詞も多数出てきます。特にコーナーの名前などは分かりにくかろうと思えます。ウイキで調べればコースレイアウトと共にコーナー名もわかりますので、もしよろしければ活用なさってください。

第3話 ブラックアウト

果てしなく続いているように見える青い空の下に、様々な色をしたマシンとパラソルが並んでいる。折り紙でも撒き散らしたかに見える光景は、鮮やかななどという感慨を通り越して目が痛くなるほどだ。それらを満遍なく照らし続けている太陽は、数世紀前と何一つ変わらず空にある。地球の時刻を標準として設定されている銀河標準時刻でも、あと二ヶ月ほどで一年が終わろうとしている。一見眩し過ぎるように感じられる陽光も、その輝き自体に力強さは感じられなかった。北半球での季節は秋、F1において、シーズンの終幕を意味する季節である。

ここでカメラが切り替わり、空からの映像から地中海を見渡す映像へと切り替わる。海からの観戦を楽しむ道楽者のクルーザーが点在し、レースの開始を静かに待っている。かつてF1が行われていた頃は、モナコGPと言えば春から初夏にかけて行われることが多く、マリンスポーツを楽しんだりプールサイドで歓談しながら観戦するという光景が数多く見られたが、さすがに冬の足音が聞こえなくてきそつな時期になっては、そういった観客などほとんど見られない。『F1で約150年、F1で約30年、このモナコはドライバー達を受け入れてきました。しかしそれだけの時間があっても、大和民族にその栄光が輝いたことは一度もありません。今日この日、ヤマトの誇る最速フリーター北嶋が、その栄光に挑戦します』

静かな立ち上がりのナレーションが、むしろ内なる高揚を感じさせる。そんな雰囲気を感じたのだらう。浮ついたクルーザーの群から切り替わったカメラは、アスファルトという大地に根を下ろした極彩色豊かな人口の花々を正面から捉えていた。その群の中段に居るカプトガニの姿は、残念ながら確認できない。

『島宮さん、とうとうこの日がやって参りました』

『そうですね。ヤマト、更に言えばF1時代の日本まで遡っても現

れることのなかった初めてのチャンピオン誕生なるか、楽しみなところですよ」

『前戦において、北嶋はポイントリーダーの座から陥落していますが、トップとの差は僅かに7ポイントしかありません』

『はい、そればかりか4位までが12ポイント差にひしめく大混戦となつています。5位のサリスもトップとは24ポイント差ですから、辛うじてチャンピオンになるチャンスを有していますね』

ここで画像が遠景のパンに切り替わり、文字情報が表示される。

『ここで改めてポイントについておさらいしておきましょう。FIでは10位までが入賞とされており、1位には25ポイントが加算されます。以下2位18ポイント、3位13ポイント、4位10ポイント、5位8ポイント、6位6ポイントで、以下1ポイントずつ減つていき10位で2ポイントとなります。そして完走したマシンには更に1ポイントずつが加算されますから、最大で26ポイント以内にいるマシンがチャンピオンの権利を有していることとなります。それでは、現在のポイントランキングをご覧いただきましょう』

画面が人工的なCGへと変わり、上位ランカーを表示する。

『ポイントリーダーは前戦優勝しジャンプアップしたマイケル・シユマックで172ポイント、次いで我らが北嶋が165ポイントで続いています。以下163ポイントでネル・マイオールが3位、160ポイントでルース・ハミルが4位、148ポイントのアンドレ・サリスが5位となっております。島宮さん、やはり注目すべきはポイントリーダーシユマックのポジションだと思つのですが？』

『そうなりますね。他の者達は、まずシユマックを捉え、追い抜かないことには優勝、そしてチャンピオンという目標が見えてきません。その点、ポールポジションを獲得したシユマックが、現時点では一歩リードと言えるでしょう』

『なるほど。それでは、スターティンググリッドを見ていくことにしましょう』

熱く、同時に軽快な音楽が流れ始めると同時に、デフォルメされ

たマシンが横向きに流れていく。

「まずはポイントリーダー、赤き帝王の優勝はこれで磐石か。ポールポジションから連覇を狙う。ベテランマイオールは4位とまずまずの位置、虎視眈々と優勝を窺う。5位に壊し屋サリス、波乱に強い男はスタートで何を望むのか。そして中段グループ上位が並び、11位に我らが北嶋、是非優勝で悲願達成を見たい。しかし隣には因縁のライバルルス・ハミルが並ぶ、最年少記録のかかる二人はどのようなバトルを見せるのか。全15戦に及ぶ総決算に、一体どのような結末が用意されているのか、今は誰にもわかりません。総勢16チーム、30台のマシンによつて最終決戦が行われます。と、たった今ピットレポーターの川尻さんが北嶋選手のグリッドに到着したようです。川尻さん、インタビューお願いします」

「はいこちら川尻です。北嶋選手、いよいよ決勝の舞台が」

「朱里ちゃん、ちよつと飲み物が少なくなってきたから、何か作ってもらっていいかな？」

「はい、今行きまーす！」

携帯を閉じ、簡素なパイプ椅子から立ち上がる。静かな、いや静か過ぎる客員控え室に彼女以外の人影はない。本音を言えば現場の空気を吸いたいたいと思っっている彼女だが、レース直前の忙しい状況を邪魔したくないとの思いから、レースが始まるまでは大人しくしていようと考えたのだ。

彼女はあくまで、自分がスポンサーの娘であり単なる客人であることを自覚している。しかし同時に、このチームの動向を我がことのように感じてもいた。昨晩はワクワクして、ほとんど眠れなかったほどだ。

「よしっ、頑張れみんな。頑張れ私！」

控え室を後にしてキッチンへと向かう。

この瞬間、レース開始まで十分を切った。

微かなノイズの後、意味のある言葉が聞こえてくる。

『ほいほーい、こっちは準備完了だ』

ヘルメットに内蔵されたマイクから、北嶋の声だけがクリアに聞こえてくる。実際の現場は会話すら困難なレベルの騒音で溢れているが、密閉型の特性である防音機能とノイズリダクションによって、一般的な電話かそれ以上の鮮明な音声を実現している。F1は現場におけるテクニックや瞬発力が重要であると同時に、バックアップの戦術や判断が明暗を分ける競技でもある。円滑なコミュニケーションのやり取りは、絶対に必要な要素だった。

「インタビュアー、ガチガチだったな」

『ああ、川尻さんだっけ？ あの人昔からF1見てるだろうし、やっぱり思うところがあるんだろうけど、インタビュアー受ける身としてはちよつとなあ』

気の入ったインタビュアーと違い、北嶋の様子はどこか他人事のようにも映る。見る人によっては真剣さが足りないと思われるだろうし、そういう指摘をする批評家も居るが、こういう時の彼が強いことを、ツクモは知っている。

開幕戦でも、北嶋はどこか別世界に居るような面持ちで、自覚がないかのような素振りだった。こんな状態でレースになるのだろうかと不安に思ったことも、今となっては懐かしい昔話だ。

「こっちのモニターに異常は出てないけど、そっちはどうだ？」

『こっちも問題ない。エンジン音もいつも通りだ。調子良いと思う』
「そうか」

「ここまでは順調だ。まずはリタイアしないこと、これは最低条件である。」

『でもなあ、さすがにモナコで11位スタートってのは、ちよつと問題だろ』

昨日の予選結果に、北嶋は満足していないらしい。

『狭くて抜きにくいモナコでこれだと、さすがに辛いぞ？』

「もう泣き言か？」

『そうじゃねーけど、事実じゃん』

「別にモナコで決める必要はないさ。確かにここは抜きにくい。直線が少ないから、ウチに向いているサーキットでもないしな。だが、この最終戦の舞台はモナコだけじゃない。ドイツとベルギーでも争われる。本音を言えば、ここでの順位は二つくらい上げれば良いと思っている程度だよ。勝負はドイツ以降だ」

『くっそー、向こうで予選してくれればなー。ポールだって夢じゃなかったのに』

「仕方ないさ。むしろゴール地点がモナコじゃなくて良かったと思っっているよ。とりあえず、最後まで希望を捨てずにいられるからね」

『そりゃ同感だな。最後ガチガチに守ってチェッカーとか、つまらないにも程がある』

いずれにしても、北嶋の中には勝利というビジョンが現実的な形で存在しているようである。ツクモとしてはそれで十分なのか、満足そうな笑みを浮かべていた。

「ともかく、モナコでの第一目標はトラブルを抱えないことだ。タイヤとブレーキはいつものことだから言わなくてもわかるだろうが、今回は特にスタート直後、気を付ける」

モナコに限った話ではないが、レース中に最も順位が大きく変動するのはスタート直後である。このタイミングで犯した少しばかりのミスが、一つ二つどころか五番十番という勢いで降格に繋がることも少なくない。しかもモナコが抜きにくいサーキットであることは周知の事実であり、数少ないチャンスであるスタート直後を狙っているドライバーは少なくなかった。強引な割り込み、オーバースピードによる突っ込み、逃げ場を失ったマシンによる接触事故、それらを誘発する要素が満載されている状況なのだ。ある程度落ち着いてくれば避けられる事態も、スタート直後にはままならないことも多々存在する。

『まあトラクションに関してはお世辞にも強い方じゃないからな。そう気張る気はないよ』

トラックシヨンコントロールシステムというのは、簡単に言えばタイヤの空転をさせないようにする制御機構のことである。走行時の立ち上がりなどは空力などのダウンフォースが影響を及ぼすが、止まった状態から走り出すスタート時にはそれが無い。そのためトラックシヨンコントロールシステムの優劣が、すなわちスタートの出来不出来を左右することが多かった。

「まあ、お前とカプトガ二なら、スタートに頼らなくても中段グループなら抜けるさ。例えモナコであったとしてもな。ただ、一つ不安はある」

『何だよ？』

「隣に居るお前の『お友達』だ」

『友達じゃねーし。腐れ縁だし』

ハミルが聞いたなら、同意しつつ淋しそうな顔をしそうな台詞である。そんな様子を思わず連想して、ツクモは口元だけで僅かに笑う。「とにかく、出来れば彼には後ろを走ってもらいたいね。お前とのポイント差も5つしかない。シユマツクをマークすることはもちろんだが、ハミルとマイオール、それにサリスの順位も頭に入れておいてくれ」

『ああ、わかつてる。というか、任せるよ、そういうのは』

初めて聞いた者なら投げやりにすら聞こえる台詞だが、ツクモが北嶋を責めることはない。北嶋の役目がマシンをコントロールしてゴールへと無事に運ぶことだとするなら、ツクモの役目は北嶋に余計な悩みや迷いを与えないことである。二人はお互いを高く評価すると同時に、互いの能力に依存してもいた。北嶋の面白いところは高いレベルの要求をした時と低いレベルの要求をした時とで、結果の質が変わらないところにある。簡単も難しいも、どちらもそれなりに片付けてしまうのだ。この特徴が、理知的でタイトな要求をするツクモの性質と合わさって、これまでの結果に繋がってきたのである。

それを察した時、ツクモは当初無茶な要求を突きつけたことがある。

る。不可能なことを要求したらどのようなパフォーマンスを見せるのか、興味が湧いたからだ。しかし結果は惨敗、不可能なことは不可能だった。そればかりか明確にパフォーマンスも落ちていた。まるでそう、出来ないとわかっていながら仕事を押し付けてくる上司に当てつけでもするかのような状況で、見事に失敗してのけるのである。以降、ツクモは可能と思えるラインギリギリを、気楽に要求することにした。プレッシャーを与えるより、現実的な目標を与えて伸び伸びとドライビングさせることとしたのである。

開幕3連勝は周囲からも驚かれたし、彼らにとっても偶然の産物だ。しかしここまで優勝争いを維持してこれたのは、彼らなりの正攻法が功を奏した結果と言える。

「さて、そろそろ時間だ。さっさと勝って、最年少王者の誕生を盛大に祝おうしよう」

『最年少？ そりゃハミルだろ』

「お前が勝っても記録更新だよ。一ヶ月弱だけだな」

『マジかよ。というか、一ヶ月ってむしろカッコ悪いな、それ』

「記録は記録だ。ありがたく貰っておけよ」

最年少記録よりも、F1のデビューイヤーに銀河チャンピオンを獲得する方が遥かに偉業なのだが、それはあえて言わないでおく。彼の優勝は、色々な意味で人々に新しい夢を見せてくれるものとなるだろう。少なくとも、ツクモはそう思っていた。

『記録か……そうだな。よし、行くか！』

派手なパラソルと女性が消え、張り付いていたメカニックも撤退を始めている。激しくも雄々しい甲高い悲鳴を上げる30台の猛牛達が、逆立つ角を研ぎ澄まして己を制していた。

その最後尾に、牛追い犬のようにマーシャルカーが黄色いパトライトを点灯させて現れる。舞台は、ようやく整った。待ちに待った瞬間を察してか、観客席のざわめきが歓声へと収束していく。

機が熟したことを示すように、青い光が灯る。

最終戦のフォーメーションラップは表面上落ち着いて、しかし秋

とは思えない熱気を纏って、開始されたのである。

アスファルトに記された白い括弧状の印、グリッドに合わせて各マシンが整列していく。前から数えて30台目、最後列のマシンが停止を果たし、その横で見守るように佇んでいた大きなシグナルに淡い緑色の輝きが宿る。

フォーメーションラップ、コースと路面を確かめるかのような一周を終えたマシン達が、いよいよ臨戦態勢に突入する。

準備は整った。

『長く続いたF1も今日が最終15戦、終わりの始まりが今始まりです。権利を有した5人の勇者、その決着が如何なるものとなるのか、これは誰にとつてのシナリオなのか、運命の女神は誰の頭上で微笑むこととなるのか、それらの答えがこれから全て示されます！』

エンジンから立ち昇る熱気と、アスファルトによって温められた大気が混ざり合い、透過する可視光線を歪ませる。陽炎に包まれたマシンの一つ一つから決意や覚悟、そして高まる緊張が湯気のように溢れているかのようでもあった。

『レッドシグナル点灯！』

秒読みが始まる。一つずつ順番に灯る輝きに呼応して、エンジン音のオクターブが跳ね上がっていく。回転数が上昇している証拠だ。そして最後の一つ、5つめのレッドシグナルが灯った瞬間、歓声とエンジン音が一つのハーモニーを導いた。

『ブラックアウトツ！』

時が止まっていたのではと思えるほどだった画面上で、一斉にマシンが動き始める。マシンは急加速を始め、その全てが目標に向かって走り始めた。

『全てのマシンが第一コーナー、サント・デポーテに向かって突き進む。パウルのスタートが良い。シュマックは遅れたぞ。後ろからガブリエルも来ている。デニスとカバロ、最初のコーナーを』

制するのは デニスツ、デニス・レーシングのパウルだつ。シユマツクが遅れ おおっと、中段で砂煙発生！ コースアウトしたマシンが一台……北嶋っ、北嶋だあ！ 何とかコースには戻りましたが、順位は……14位に後退、チャンピオンロードにイエローシグナル点灯かあ！？」

『第一コーナーで押し出されたようですね。その後方で接触もありましたから、むしろコースアウトだけで済んだのはラッキーだったのかもしれない。ただフォーチュンベルのマシンはタイヤにあまり優しくないので、余計な負担がかかっていなければと思います。』
『それにしてもモナコでは致命的過ぎる。お、スタートトリプレイです』

まずは先頭集団を上空から捉えた画面に切り替わる。

『シユマツクが明らかに遅れていますね。レコードラインに居なかったパウルに完全に前を押さえられています。3位のアインもなかなかのスタートでしたが、カバロというチームはファーストとセカンドの役割を明確にしていますから、あえて後方のブロックに回ったのでしょ』

上から見るとハッキリ分かるが、2台並んだ深紅のマシン バラッカ・カバロの2台の内、後方の一台の挙動が明らかに不自然である。急加速して、明確に減速している。もつとも、その後の彼カバロのセカンドドライバであるエドモンド・アインの働きがなければ、後方から迫るマイオールやサリスにも抜かれていた可能性もあつた。

『この辺りは、さすがカバロらしいところですね』

解説の言に、実況が感想を添える。

『と、今度は中段グループを捉えたりプレイです。北嶋に何が起ったのか？』

斜め前方、恐らくはスタンド上部のカメラからの映像である。

『ハミルがロケットスタートを決めていますね。その後方に付いた北嶋が直線スピードを生かして加速し、アウトから行って ハミ

ルがオーバースピードでコーナーで膨らんでいますね。そのせいで北嶋がコースアウトしています。そしてこの際、強引にインへ割り込もうとしたロッソのマシンがメイファのマシンと接触、大きなクラッシュには発展していませんが、数台のマシンがトラブルを回避してコースアウトしていますね』

『結果、ハミルは7位にジャンプアップ、北嶋は14位ですか。これは大きく差が開きましたね』

実況の嘆きは、溜め息が聞こえないことが不自然なほどの落胆が窺える。そして代わりにとばかりに、朱里は小さな吐息を漏らした。しかしそんな彼女の背中を、大きく無骨な手が優しく叩く。

「こらこら、まだ溜め息なんぞ吐くのは早すぎるぞ！」

「あ、そうですね。始まったばかりなんだし」

ピットガレージの一角に陣取る一員の中に、朱里の姿はあった。

その隣には眼鏡をかけたオッサンと、切れ長の目が妖艶な雰囲気を増長させている女性の姿があった。

「そうそう、まずワシらが信じずに誰が信じてくれるんだ？ 正直レースが始まってしまえば、お前さん同様ワシや高千穂クンたかちほに出来ることなど応援くらいしかない。ならば精一杯、応援してやらねばな」

「はいっ」

朱里の笑顔に場が和む。

「でも監督、これはやっぱりピンチですよ？」

笑顔ではあったが、現実的なフェイ・高千穂の指摘に嘘はない。

「大丈夫。ワシは北嶋クンもツクモクンも信じている。むろん、他の皆もだ。このチームは確かに若い。しかしだからこそ、いつでも前を向いて進んで行けるとも思っている。やってくれるさ、彼らなら」

チーム監督、富田宗治とみたそうじの瞳には、いつになく力が宿っている。優勝すればスポンサーの受けが良いばかりではない。それは間違いない。しかしそく次へと繋がり、このチームの発展へと続くこととなる。しかしそ

ういつた損得勘定は、今の彼からは見られない。ここに居る彼は、小太りで額が広がっていくことを少し気にしているオヤジでしかなかった。ビール片手に勝った負けたとはしゃいでいる、そんな純粋さがあつた。

いずれにしてもレースはまだ始まったばかり、それだけは誰の目にも明らか、純然たる事実だつた。

第4話 モナコ戦線異常アリ

3周目を迎える頃には、大分状況が落ち着き始めていた。各マシンが自分のペースを取り戻し、前のマシンに比べてペースの遅いマシンが遅れていき、その後方にいるマシンの頭を抑える形となる。先頭集団が間隔を広げ始め、6位から数珠繋ぎとなっていた。抜きにくいと評判のモナコでは、もはや珍しくない光景である。

しかし、それは同時に前車との間隔が狭まり、追い抜きオーバーテイクしやすくなるという事象を生む結果となるので、後方に沈んだ北嶋にとつては悪いことばかりでもなかった。むしろ、この状態に長く留まればトップとの差が開くことになるので、出来る限り早い段階でのペースアップが必然であることは言うまでもなかったが。

（抜き所が少ないとはいえ、無いワケでもない。まずは第一コーナ―、仕掛けてみるか？）

スリップストリームから加速を見計らってイン側へとスライドさせる。距離的には微妙だが、ブレーキタイミングを遅らせれば前に出られるという予感があった。

『待て。まだ行くな』

「あ？ 何で？」

メインストレートの出口が見えかけたところで、ツクモの指摘が割って入る。北嶋は疑問を口にしつつも自然にアクセルを戻し、レコードラインにハンドルを切って再び14位に納まった。

『第一は接触があった。破片がまだ残ってるかもしれん。あと2周は様子を見てくれ』

「なるほど、了解」

FIのマシンを支える車体シャーシは硬く、しかも軽いプラスチック素材で出来ている。繊維強化プラスチック（FRP）ほど脆くはないが、接触事故によって破片が飛ぶことは珍しくない。そして飛び散った破片は、間違いなくタイヤよりも硬い。つまり、パンクの原因とな

り得るのである。非常に軽い素材であるため、風圧などによって飛ばされるので、その場に長く留まることはないが、しばらくは警戒の必要があるのだ。

（とはいえ、第一で抜けないとなると、抜くチャンスがますます少なくなるな）

美しい海を望むと名付けられた上りの直線を抜け、左右とコーナーが続く。メインストレートもそうだが、このボー・リバージューも距離が短く、車間を詰めるのがやっつとだ。メインストレートでは持ち前のストレートスピードで何とか追いつけるものの、上りのボー・リバージューでは詰めるには至らない。

（このちまちましたところは、やつぱ嫌いだな）

それからすぐに訪れた右に折れるミラボーコーナーから、極めて半径の小さいロウズ・ヘアピンをグルリと旋回していく。最高速400キロを越えることすらあるF1のマシンが、時速50キロ程度にまで減速しなければ曲がれない超低速コーナーは、迫力にこそ欠けるものの、じっくりマシンを観察するには見所のあるコーナーだ。ヘアピンを抜けてすぐに右へと90度折れたマシンは、緩やかに右へと旋回しているトンネル区間へと突入する。視界が悪く先が見えないトンネル内で、それでも最高速へと引き上げるドライバー達の度胸が試される局面でもあった。

（順当に考えるなら、ここしかないよな）

北嶋は手元のボタンを操作し、ダウンフォースのレベルを一段下げる。加速によって生じるダウンフォースを減らし、瞬間的に車重を軽くするのだ。すなわち、直線スピードが伸びる。もちろん、安定性の崩れたマシンはコントローラーが難しくなり、ハンドル操作によるレスポンスにもブレが生ずる。このシステムとて、決して万能というワケではないのだ。

緩い右コーナーとトンネルを抜けた先に、小さなクラック シケインが待っている。このヌーベル・シケインこそが、モナコにおける唯一の抜き所と言われていた。それ以外では、直線スピードに

よほどの差がない限り、なかなか抜くことは難しい。

彼は更に手元を操作し、今度はダウンフォースを上げる。コーナーでのダウンフォース確保はマシンの側で勝手にやってくれるが、今回の引き上げはブレーキのためだ。ブレーキの効きを上昇させ、シケインに入るまでのブレーキタイミングを遅らせるためである。そうすることで、前の車より前に車体を持っていくことが可能となり、結果としてオーバーテイクが可能となるのである。

(よしっ、行ける！)

シミュレーターやテスト走行でコースレイアウトと特性は身体に憶え込ませてあるが、それでも実際のレースで他のマシンと並走するのは勝手が違う。そんなことは重々分かっている筈の北嶋ですら、やはり現場で驚かされることも多かった。

更に彼は、次いで現れた左に折れるタバコ・コーナーを曲がり、左右と細かなコーナーを繋いで難易度の高いラスカス・コーナーへと突入していく。ちなみにこの厳しいヘアピンを抜けると、F1ではメインスタンド前へと戻ることになるのだが、F1ではここで左に折れる。

(さすがにここはなあ……せめてストレートだったら何とかなるのに)

通称海岸通りと呼ばれる区間は、大きなS字コーナーが二つ重なったような形になっている。そして何より大きな特徴は、この路面がウエットコンディションであるということだ。この路面の標高はゼロ、すなわち海面とほぼ同じ高さに設定されている。しかも波が直接入ってこないようシールド処理こそされているものの、飛沫は絶え間なく降り注いでいた。すなわち、常に雨が降っている状況と変わらないのである。そのためタイヤチョイスはウエット寄りに設定せざるを得ず、ドライでも持ちの良い浅溝のタイヤを選択することが必須だった。しかし浅溝にも何種類もあり、どの程度ウエット寄りに設定するかは各チームの特性と裁量に委ねられる。ちなみに北嶋が採用しているのは、最も溝の浅いタイヤだ。

(だあつ、やっぱりダウフォを強めにしないとスライドが酷い)

ダウンフォースの上昇は確かに便利な機能の一つだが、それはタイヤやブレーキといった部位に明確な負担を強いることになる。ただでさえ強めなければならぬ状況下で無理な挙動を演じられるほど、北嶋にもカブトガニにも余裕はなかった。

(ここからはさすがにウイング組に付いていくのがやっとだな)

ウエット区間を抜けた瞬間、右回りの大きな複合コーナーが見えてくる。ほぼ180度回り込むことになる大きなコーナーは、加速+遠心力によるGとの勝負となる。アウトには膨らまず、しかし出来る限り加速しながら抜けていかなばならない。そしてこの先は、短い直線と直角のコーナーが連続するストップアンドゴーの区間に入る。左右右左と連続で訪れるコーナーは、旋回性能と加減速性能を問われることとなる。直線スピードを売りにしているフォーチュンベルにとつては、むしろ差を広げられる区間だ。前の周に第一コーナーで負い付けたのは、数珠繋ぎという特殊な状況があったからこそこの話である。

(これで一周、やっぱり基本的にはヌーベル・シケインしかないか)

一周5・18キロメートル、その区間で明確に抜けるポイントが一つしかないというのは、やはり北嶋にとつて喜ばしくはない。しかし第一セクションにあたるモナコの周回数22周ある。一周にたった一度でも、残り18周なら18回のチャンスが訪れるということだ。

諦めるつもりはないとばかりに、北嶋は力強くアクセルを踏み込むのだった。

アナライザー

分析人の仕事は、膨大なデータの海から必要な情報を抽出し、時には演算処理を施した上で提示することにある。チームによっては総合的な判断を下す監督と兼任することもある、極めて重要なポジションだ。フォーチュンベルで分析人 通称データマンをしてい

る佐藤拓也も、かつてはセツティングや状況判断を任されていたことがある。しかし今は、あくまでデータの回収解析と抽出に専任している。その理由はただ一つ、シヨリ・ツクモという戦術監督が隣に居るからだ。元々無口で、滅多に他人と話すことのない彼が積極的な自己主張を好む筈もなく、その役割から開放されて喜んだことはもちろんだが、それでも自らの判断が劣っているなどとは思っていなかった。譲ったのは指示や命令系統の権限だけで、データ解析による結論が間違っていると判断した場合、すぐにでも監督へ報告するつもりでいた。

だがツクモがチームに加入して三年、佐藤は一度として上告をしたことはない。その的確な判断を見る度に、人は経歴や見た目ではわからないものだ実感する日々である。

元々ツクモは、レースとは全く関係ない所で働いていた。彼は鈴本運送で配送ダイヤの管理をしており、少なくともレースという観点で見た場合素人同然、というより素人そのものだったのである。そんな彼がスポンサーの娘とはいえ、年端の行かない高校一年生の朱里の勧めでチームに入った時、相応の衝突や不満が当然ながら持ち上がった。しかも当時、切れ者と評判ではあったもののツクモの年齢は26歳、社会ではまだまだ若造の部類である。整備担当のオヤッサンこと片平左京などは、正面から馬鹿げた抜擢だと食ってかかったものだ。しかし今は、急先鋒だった片平でさえ、ツクモの采配に不満を漏らす者は居ない。むろん意見を違えて異を唱えることはあるが、それは明確な議論であり、確執や私怨などとは無縁のことである。

不思議な人だと、佐藤は改めて思う。特に彼がそう実感するのは、今の自分の仕事か、かつてしていた仕事よりも遥かにエキサイティングな喜びに満ちているという点だ。

他人に指示を出すのは億劫だし、接触を自ら求めるのは苦痛が伴う。それでもやはり、自らが選び、弾き出した答えによってレース展開が左右されるという状況にはやりがいを感じるし、実際に楽し

いと思っていた。しかし今、緊急性の高い情報を引き出してツクモに提示する瞬間は、そういつた見える張り合いとは別のワクワク感が、明確に存在するのである。自分のものではない自分よりも面白いと思えるストーリーラインが、自分の提示したデータによって動き始めるのだ。ずっと裏方だと思っていた自分が舞台の上に引つ張り上げられたかのような、奇妙な高揚感を感じていた。自分が示し、それを元にツクモが考えれば何か動き出す。まるで積み重なっていく歴史を見ているかのような感慨なのかもしれない。

「あと7周……4周足りないか」

猛プッシュを続けて順位を11位と、スタート時のポジションに戻した北嶋が10周目に突入したところで、佐藤は解析の終わったデータをツクモのモニターへ送った。

それはタイヤの磨耗状況とブレーキの温度変化、それらを周回毎に並べ、更に予測値を弾き出して限界値を明示したものである。このままのペースで走り続ければ、このモナコでの周回数、すなわち22周目を待つことなくタイヤとブレーキに限界が訪れる。仮にこの二つが悪い意味での相乗効果を生めば、予想よりも更に限界が早まる可能性もあった。

「北嶋、一旦ペースを落とすぞ」

インカムに手を添え、素早い決断を下したツクモがドライバーに指示を出す。

『タイヤか？』

「それとブレーキもだ」

タイヤと同様ブレーキも消耗品の一つではあるが、この場合問題なのはブレーキ自体の耐久性ではない。そもそもブレーキという機器は、ブレーキパッドなる物を押し付け、その摩擦によって制動をかけるという仕組みで成立している。この時、失われた運動エネルギーは熱エネルギーへと変換されることによって、止まるという行為が達成されるのである。すなわち、ブレーキパッドが熱いままでは効率的な熱変換が行われず、制動に異変が起こったり、ブレーキ

機構そのものに何かしらの不具合をもたらず原因にもなり得るのだ。軽度の故障であれば交換という手段もあるが、事故でリタイヤなどという状況を招くようなことにでもなれば、そこで全てがお仕舞いとなってしまう。それだけは避ける必要があった。

『まあ、さすがにこのコースで抜こうとなると、そうなるのも当然か……で、このままモナコは諦めか？』

「そのつもりならタイヤ交換をオススメするがね？」

『まさか』

北嶋の声は楽しそうだ。

「それならばしくはタイヤとブレーキを休ませてくれ。11位は決して悪いポジションじゃない。トップとのタイム差も30秒ないしな。まだ諦めるには早すぎる」

『当然だな』

佐藤から見れば消極的な策にも思えるが、北嶋の声に落胆はない。むしろ何か、心躍るチャレンジを突きつけられたかのような、奇妙な高揚感すら感じられた。

「さてと」

耳元でボタンを操作し、今度はガレージにいるチーフメカニックへと繋ぐ。

「片平さん、聞こえていますか？」

『おう、タイヤ交換の準備ならもう始めてるぞ？』

ここまでは、佐藤の予想通りだった。

この状況で取れる策は大きく分けて二つしかない。攻めるだけ攻めて限界が来たら守りに入るか、まずは余裕を作ってラストスパイトをかけるか、どちらかしかない。ツクモは後者を選択したようだが、いずれにしても保険のためにタイヤを準備しておくのは当然のことだ。

「いえ、交換用のタイヤなら片付けて下さい。アイツは絶対に入ってきてません」

さすがに佐藤も、この台詞には驚いた。

『おいおい、そりや入つちまったら絶望的だつてのはわかるが』
「そうではなく、アイツのタイヤマネジメントが的確であることを知っているからです。大丈夫、最後までもたせますよ、絶対に」

『……わかつた。で、わざわざ連絡を入れたのはそんな話をするためじゃないんだろ?』

「今このモノコで出来る努力は、全て北嶋にしか出来ないことです。我々はそのための材料しか与えることが出来ない。しかしその先、ホツケンハイムまでになら、出来ることは山とあります」

『もう向こうへ行く準備を始めると?』

「正直、ブレーキが思っていた以上に消耗しています。交換作業は時間が時間ですから出来れば避けたいですが、一応準備はしておいて下さい。それと、この状況ではオーバートイクが必須となります。追い抜き係数を0.1上乘せしてセッティングを組んで下さい」

『あいよ。次が勝負つてことだな?』

「我々はいつだつて勝負していますよ」

『わははははつ、もつともだ!』

佐藤は改めて感心する。それは勝負を志す者にとって当然のこととわかつてはいるが、それでも勝つことだけを目標に据えることは難しい。特に状況が思わしくない場合、リスク回避を優先するのはむしろ当たり前のことだ。しかし今、ツクモはその選択の一つをバツサリと切り捨てたのである。この流れを、佐藤は正確に評価する自信がない。もし失敗に終われば非難を受けて当然だと思うだろうし、成功しても結果論だと感じるだろう。しかし何故か、この場に居る佐藤にとつて、ツクモの選択が間違っているような気がしなかった。いや仮に失敗したとしても、それを諦められるだけの覚悟があつたと言つべきだろうか。

「拓さん、面倒なお願いをしても良いですか?」

拒絶する気にはなれない。佐藤は神妙な面持ちで、それでもしつかりと頷きを返した。

「各車のペース変動と路面状況の変化を出来るだけ数値化して欲し

いんですよ。元になるデータのチョイスはお任せします。出来れば5周以内に」

抽象的かつ明らかに困難な要求だ。しかも時間的な制約が厳しい。しかし彼の頭は、それが可能かどうかということよりも早く、どういうデータを集めれば良いのかという方向へと、自然に思考が流れていった。

そして気付く。

苦しい時、今が苦しいことを認識するのは重要なことだ。しかしそれは、苦しみから逃れる最良の手段ではない。

佐藤は求めに応じ、データの海へと潜る。

自分が楽しんでいることを自覚しながら。

15周目、順位の変動もなく単調に続くかと思われたモンテカルロに、突然の変調が訪れる。

「ああっ！」

画面内の変化に逸早く気付いた朱里が、思わず声を張り上げた。『おおっと！ トンネル出口で一台がウォールに激突しているっ。

この深紅のマシンはまさかシュマック……いや、アインですね。シュマックのチームメイト、3位を走っていたエドムント・アイン、痛恨のミス！』

声を上げてしまった朱里同様、監督の富田と秘書の高千穂もモニターに釘付けだ。

『リプレイ出ます』

トンネルに3台、アイン、マイオール、サリスのマシンが縦に並んで入っていく。しかしトンネル出口付近で前を走るアインの挙動が突然乱れ、後輪が左に流れてガードレールに激突、破片を散らしながらシケインを突っ切った。そのすぐ後ろを走っていた2台はフルブレーキをかけて危うい所で何を逃れたものの、緊急避難のためコースアウトを余儀なくされ、少し後方を走っていたマシン 八

ミルに抜かれる結果となつてしまった。

『トンネル内で接触がありましたかね？』

『どうでしょうか。見た目にはドライバーのミスか何かしらのトラブルに思えますが』

実況の疑問に、解説が曖昧な答えを返す。

『とりあえずドライバーは無事そうですね』

後部を激しく破損し、フロントノーズをシケイン出口のコース上に突き出すような格好で停止した深紅のマシンから、フルフェイスヘルメットにパイロットスーツを着込んだ男性が姿を現す。

モータースポーツに事故は付き物で、それが死亡に発展するケースも存在したのだが、このF1において、少なくとも密閉式のカプセルシートを採用してからは、死亡者どころか重傷者も出してはいない。人命優先のため形や大きさに変更が効かず、特に空力重視のチームにとって厄介な標準パーツではあったが、さすがに異を唱えるチームは皆無だった。

『おっと、ペースモードに突入したようですね』

ペースモードというのは、レース進行に何かしら障害の起こり得る事態が発生した時、その要因を取り除く目的で一時的にコース上でのバトルを禁じるための措置である。このモードが発令している時は全車が強制的に自動運転オートクルーズとなり、前後との差を保ったまま周回数を重ねることとなる。もちろんこの時に重ねた周回もカウンタされるので、珍しいケースではペースモードのままチェッカーフラッグが振られたということもあつた。

『では、ここで改めて順位をおさらいしておきましょう。トップはスタートで飛び出したまま独走を続けているデニス・レーシングのパウル、そのパウルを3秒差でポイントリーダーのシュマックが追う展開です。3位にはスターティンググリッド12位からロケットスタートを決めたハミルが続いています』

『あの事故が起こる前は6位だったのですから、アインには申し訳ありませんが、まさに幸運だったと言わざるを得ませんね』

『モナコの風はハミルに吹いているということでしょうか。4位にフランク・グランプリのマイオール、5位にブルーフィッシュ・レーシングのサリスが並んでいます。この二人はスタートから全く差が変わりませんね』

『どちらもずつとアインに頭を抑えられる格好となっていましたから、これからペースが上がるかもしれません。ハミルのペースも速いですから、シュマックを含めた4人が直接対決という構図になる可能性もありますね』

かつてF1においては、エントリーしている2台によるチームプレイ　チームオーダーが原則的に禁止されていた。フェアプレイの精神にもとる行為であると判断されたためである。しかし現在、それが極めて悪質な行為と判断されない限り（故意によるクラッシュや周回遅れによる進路妨害など）基本的にはチームオーダーが容認されている。それは一説には、マシンやコースの多様化が進み、抜くという行為の価値が昔ほど高くなかったというのが根底にあると言われている。

もちろん、チームオーダーを甘んじて受け、他車へのブロックやペース調整を行っているドライバーに対する風当たりが強いのは、今も昔も変わらない。

『6位に同じくブルーフィッシュのウエブナー、7位にフレール・レーシングのクラクフ、8位にフランクのガブリエル、9位にロツソのフェテルと続き、入賞圏内ギリギリの10位に我らが北嶋の名前がようやく出てきます。スタートから一つ順位を上げていますが、まだまだ先頭は遠いですね』

『とはいえ、スタート直後のトラブルで14位まで落としての10位ですからね。このモナコでこれだけ順位を押し上げているのは彼とハミルだけです。ただ、ここ5周ほどペースが落ち着いていますから、さすがにタイヤが苦しいのかもしれない』

『現在周回数は17周を終えようとしています。と、ここでようやくマシンの撤去が始まったようです。あー、リアウイングはかなり

損傷していますね』

『この様子だと、路面にもかなりの破片が残っていると思います。基本的にオートクルーズ中はハンドル操作も出来ませんから、破片を拾ってしまうかどうかは運次第なんですよね』

吊り上げられる深紅のマシンが、前後に揺れながら空中を移動している。作業者の面子は人間からアンドロイドへと変わりつつあるが、光景そのものは数百年前と大差はない。

「もう、さっさと片付けなさいよっ、そんなの！」

その緩慢に映る作業に声を荒げたのは、朱里である。

「そう言うなつて。彼らも怠けているワケじゃねーんだ」

窺める野太い声に三人が一齐に振り返ると、フォーチュンベルカラーである黄色い作業着^{ツナギ}に身を包んだ片平左京の姿があった。当年で日本式には厄年になる彼だが、童顔で浅黒い肌の彼からは若々しさすら感じ取ることが出来る。ぶつきらぼうなオヤツサンという認識が定着しているが、ぶつきらぼうはともかくオヤツサンと呼ばれるのは少しばかり抵抗があると本人は思っている。

「でもさ、そういうしている内にドンドン周回数が減っていつちゃうじゃない。もう4周くらいしか残ってないよ？」

「確かに10位は優勝を目指すために十分な順位じゃないが、このモナコでトップを走ることが目的じゃないからな。むしろタイヤを温存するためなら、このままペースモードが続いてくれた方がありがたいだろ」

「タイヤ温存？」

「かなり苦しかったみたいだぞ。まあ、あれだけ派手にプッシュしたんだ。タイヤに負担もかかるさ」

「じゃあひよつとして、ピットに入ってくる？」

「いやそれはない」

片平は笑った。この状況でこのような断言をすること自体、滑稽な話だ。

「北嶋もツクモも、ずっと前を向いて走っている。だがたからこそ、

伸び上がるために身を縮ませることだってあるんだよ。今がその時だし、奴らならきつと

『北嶋ペースアップ!』

実況が叫ぶ。

『ペースモードが解除された途端、北嶋のペースが目に見えて上がりました。前にいるフェテルとの差は3.2秒、一周で2秒以上縮めています!』

『北嶋はペースを落としてタイヤの温存を図っていたようですね。一方のフェテルはかなりコーナーリングが苦しいようです。アンダーステアが出ていますね。ペースが伸びません』

アンダーステアというのはハンドルを切った角度に比べて大回りしてしまう傾向のことで、モータースポーツにおいては主にタイヤの磨耗によって起こる。これと逆の現象をオーバーステアと呼び、前輪と後輪のグリップ力の差異によって生ずることが多かった。前輪が磨耗してグリップ力が低下すればアンダーステア、その逆に後輪がグリップ力を失えばオーバーステアとなる。どちらにしても、マシンコントロールが難しくなるという一点においては共通している。

『一方の北嶋はペースが良いですね。フォーチュンベルのマシンはタイヤに苦しいというイメージがありましたけど』

『北嶋選手はタイヤマネジメントに定評がありますからね。バランス良く磨耗している、ということなのでしょう』

『おっと、またタイムを縮めたつ。フェテルとの差は2秒を切ったぞ!』

『まあ、そういうワケだ』

突然の変化に画面を凝視することしか出来ない面々の後方から、ニヤリと笑った片平がそう告げる。とはいえ、彼も内心では舌を巻いていた。タイヤの状況を考えれば走り切るだけでも限界ギリギリだった筈だ。その状況下で前を走るマシンに追いつき、追い越そうとしているのである。メカニックとしては心臓にも胃にも悪い。

「連中は心配いらさないさ。むしろカーゴ移動で監督達が怪我でもされたら問題だ」

モナコが終われば次はドイツ、高速カーゴにマシンと関係者を乗せて一度に移動するというのがF1のシステムだ。基本的にチームによって差異のないシステムとなっているが、それでも慣れたチームとそうでないチームの間には差が生ずる。

「そうだな。我々が足を引っ張っては本末転倒だ。そろそろシートに座って観戦することにしよう」

監督富田の言に二人の女性が頷きを返す。ここに居る誰もが、チームの勝利を望んでいるのだ。異論や反論など出る筈もない。

『北嶋、とうとうフェテルの後ろに張り付いたあ！』

結果、北嶋はモナコを9位というポジションで走り終えることになる。銀河の覇者を目指す小さなチームの挑戦は、ささやかながらも明確な前進によって、単なる夢物語からの脱却を果たしつつあった。

次はドイツ、ホッケンハイムの森が待っている。

第5話 タイヤ攻防戦

空中を、幾つもの大きな四角い物体が高速で飛んでいく。

この極めて奇妙な構図が、F I名物の一つであるカーゴ移動の情景だ。F Iという競技が複数のサーキットを渡って勝敗を決するというシステムを採用、構築して以来ずっと続いている習慣的光景であった。ちなみに内部は慣性制御が働いているため、観光地を走っている路面電車程度の揺れしか感じないが、実際には音速を超えるスピードで飛んでいる。モナコからドイツ ホッケンハイムリンクまで約十分の空中移動は、参加する側にとっても観る側にとっても適度なインターバルとして認知されていた。

そのカーゴ内の一角、ガレージとは壁一枚隔てたモニター室に、病院の待合室で診察を待っている患者よろしく、5人の男女が静かにシートで時を費やしている。マシンの設定や点検を行うメカニック達、片平と中根、そしてタイガーウツドの三人と補佐役である5体のアンドロイド、加えてマシンに乗ったままの北嶋はここに居ない。彼らは今頃、ホッケンハイムに向けての最終点検に追われている筈だった。

会話は無い。佐藤がキーボードを叩くりズムと、体勢を変えた時に生ずる衣擦れの音が時折響くのみだ。あまりにも静か過ぎて、音を立ててしまうことが憚られるほどだ。こんな時には自然と、そして興味がなかるうとモニターに視線が集中するものだが、高速移動中のカーゴは電波も遮断するレベルの防御シールドを展開しており、垂れ流しの民間放送が受信されることはなかった。

『なあ、一ついいか？』

インカムを首にかけていたため、ツクモの抱えていた端末から北嶋の声が響く。この状況では当然のことながら、全員の視線がツクモの膝上へと集中した。

「何だ？」

この奇妙な注目に苦笑しつつ、ツクモが短く応じる。

『朱里つてさ、学校とか大丈夫なのか？』

「アンタはこの状況で何の心配をしてるワケ？」

自分が今、全銀河から注目を浴びるような立場に居るといふ事実からすれば、朱里の発言の方が至極真つ当である。とはいえ、北嶋には北嶋なりの言い分もある。

『いやでもさ、お前の学校って超お嬢様学校だろ？ 前のレースから二週間くらい休んでるじゃねーか。そんなんで大丈夫なのか？』

「あのねー北嶋くん、確かにウチは世間一般に言われているお嬢様学校だし、こんなに長く、しかもレース観戦なんて理由で休学を認めてくれるような学校でもないよ。でも銀河標準時刻とヤマトの時刻が違うことくらい知ってるでしょ？」

『ん？ どういうこと？』

「つまり、ヤマトは今夏真つ盛りという意味だ」

朱里の説明を、ツクモが補足する。

『え、夏？』

「フリーターの北嶋くんには分からないかもしれないけど、世間の学生には夏休みという便利な長期休暇が存在して」

『知つとるわ！』

室内に笑い声が木霊する。たったそれだけのことで、どこか淀みが堆積していたかに思えた雰囲気が消し飛んでしまった。それが自然な、北嶋の抱える緊張から発生した発言であるうことは、容易に予想出来る。しかしそれでも、ツクモはこの一連の流れに感心し、このチームを評価していた。わかっていることも出来ないことなど山ほど存在する。だがこのチームでなら、その出来ないことが出来るようになるような、そんな気がしていた。こと仕事において、個性という名の資質にこれほどの価値を見出したのは、生まれて初めてのことだった。

そんな柔らかな笑みを浮かべるツクモの視界に、オレンジ色のカウントダウンが入ってくる。到着予定時刻まで残り二分を切ったと

こゝろで表示されるようにしていたものだ。

「北嶋、そろそろ時間だ。準備は出来ているな？」

『おうよ！』

「順位的には9位だが、10位とはほとんど差がなかった。カーゴのタイミングで引つ繰り返っているかもしれん。リスタートは慎重にな」

『ああ問題ない。そもそも次はホッケンハイムだ。モンテカルロと違って、コースに足を引つ張られることはないよ』

「そうだな」

内心としては不安もある。しかしツクモは、あえてそれらを封じて同意した。今この瞬間に最も重要なのは、勝利を掴むという目標を見定めた上で、勝てるという確信の元に新たなサーキットへと走り始めることである。トップとのタイム差は約20秒、上手くいけば追いつける差であると同時に、上手くいかなければ絶望的な差でもある。結局のところ、北嶋の内心と技術に依る側面が大きいのだ。「あ、そろそろ？」

小さな揺れを感じて、朱里が天井を見上げる。

急減速によつて吸収し切れなかつた慣性が、揺れという形で間近となつた到着を訴える。外の景色は見えず、衝撃もほとんどないが、それでも大地に降り立ったことを、どこか本能的に察知してツクモと佐藤は立ち上がった。

そしてそれと時を同じくして、開かれたシャッターから轟音と共にカプトガニが発進していく。優勝というただ一つの栄冠を掴む、そのために。

ホッケンハイムリンクは、上空から見ると大きなオーバルコース歪んだ卵が少しばかり欠けたような形に見える。緩やかに右回りをしている直線に近い曲線と、ヒモをクシャと丸めて放り投げたような形をしたテクニカルコーナーがシンプルな直線とコーナーに

よって繋がれているような印象だ。基本的にはストップアンドゴーを重視した立ち上がり勝負のコースであるが、やはりこのコースを最も象徴しているのは森林を抜ける高速区間であろう。森林が切り開かれるような形で伸びている半径の大きな曲線は、二つのシケインを挟んでいるにもかかわらず瞬間的に時速400キロを越えることも珍しくない。かつてはこのスピードが危険視され、改修を重ねられてテクニカルなコースへと変貌した時期もあったが、鮮やかなマシンが深緑の森を駆け抜ける様は、やはり人目を惹くに十分な魅力を有しているようだった。

そんな、最高速と直線スピードを求められるコースにおいて、このフォーチュンベルのマシンが遅れを取る道理もなく、快進撃を続けていた。

ツクモが予想していた通り、到着直後は10位に一旦後退した北嶋だったが、ピットロードを抜けた最初の直線で簡単に追いつき、その周りが終わる頃には追い抜いていた。そして現在の順位は7位、トップとのタイム差も18秒にまで縮めている。

(6位とのタイム差は3秒、アレを追い抜けばトップとの差も15秒くらいになってるかな)

このポジションになると、さすがに中段グループほど簡単には抜かせてもらえない。特色に違いこそあるものの、相応のタイムを弾き出せる程度の性能は有しているのだ。だからこそ、一台かわすことに対する価値も上がってくるし、抜かれないことの重要性も増すこととなる。

(前の車は……ブルーフィッシュ青魚か。そうなると、勝負はシケイン後だな)

ホームストレートを立ち上がり、そのまま若干右へと湾曲している高速区間へ突入する。ブルーフィッシュ・レーシングのマシンも高速仕様にしてある筈なのだが、それでも元々中低速のコーナーを得意とするマシンである。その差が見る見る縮まってくる。しかし真後ろに追いつく直前にシケインへと突入し、立ち上がりに優れたブルーフィッシュに水をあけられた。しかし続く区間も大きく右に

回り込む高速コーナーであり、直線スピードに勝るフォーチュンベルが差を詰めていく。

と、スリップストリームの影響を受ける領域に入ろうとした矢先、ブルーフィッシュのマシンは大きく右へとハンドルを切る。もちろん進路を譲ったのではない。北嶋とは別のコースを『選択』したのだ。

F1におけるホッケンハイムリンクの大きな特色として、複数のコースから任意のコースを選択出来るというシステムがある。距離にして最大2キロメートル近い差異が生ずることもあり、各チームにとって極めて重要な選択となる。その基本的なポイントは、オフロードコースをどの程度走るか、というものだ。ホームストレートの途中に一箇所、最初のシケイン出口に一箇所、そして先程ブルーフィッシュの入って行った計三箇所が、その分岐点となっている。いずれも逸れた瞬間からオフロード区間へと移行し、最終的には正規のオフロード区間で全て合流する。

二つ目のシケインを抜けた北嶋は、直前で車高とサスペンションを調整してオフロード区間に突入する。他のコースではオフロード区間のコーナーが複数存在するが、この最も距離の長いコース選択ではオフロード区間にコーナーがない。これは、特にタイヤへの負担を憂慮しているフォーチュンベルにとって、極めてありがたい仕様だった。

（来るなよ来るなよ）

合流ポイントには白線で区切られた路側帯が設けられており、トラブルを避ける工夫はなされているものの、そこは真剣勝負の世界である。微妙なタイミングで飛び出してくれば事故にも繋がるし、不要なブレーキやハンドル操作が必要にもなってくる。

「来たっ！」

姿の見た青魚のマシンと並ぶ。フォーチュンベルの直線性能とブルーフィッシュのコーナーリング性能は、ほぼ互角の水準にあるようだ。だが、すでにスピードに乗り始めているフォーチュンベル

のマシンに対し、ブルーフィッシュのマシンはこれから立ち上がる
ところである。並んだとは言っても、それは一瞬のことではない。
「よしっ、6位！」

横目に残る二つの合流ポイントを確認しつつ、後続のマシンがブ
ルーフィッシュ一台であることを確信する。もっとも、二つ目の合
流ポイントはともかく、最後の合流ポイントから出てくるマシンな
ど皆無なので、さして心配もしていなかったが。最も距離を稼ぐこ
とのできるオフロードコースは、全く整備されていないような林道
ではない。どのチームも一度は模索してみるが、活用法は見出せ
ていないのが実情だ。特殊な装備とタイヤで挑めば何とか、という
分析もされているが、そんな装備ではオンロード区間で劇的に遅く
なってしまう。それだけのリスクを負うだけのメリットは、例え
下位チームにおいてすら存在しなかった。

（さて、ウチとしてはこっからが問題だな）

実のところ、数周という範囲においてなら最短オフロードを選択
するだけのメリットがない訳ではない。しかしながら、このホッケ
ンハイムでの成績をトータルで考えた場合、それはどうしても難し
い選択となってしまう。それはこのホッケンハイムが、極めてタイ
ヤに厳しいサーキットへと変じているからである。

（うわっ、やっぱり食い付きが良過ぎる！）

直線とオフロードが終わり、緩やかな右コーナーを過ぎて鋭角な
左コーナーを曲がった瞬間、何かに後方へ引つ張られるような感覚
すら北嶋には感じられた。それは原因だけを述べればタイヤのグリ
ップ力が一時的に増したために起きたことだが、それは決して嬉し
い話でも楽しい話でもない。

ここからホームストレートまでの中低速区間は、通称灼熱区間と
呼ばれている。熱吸収効率の良いアスファルトを敷いてある路面は、
すでに秋めいた直射日光を浴びているだけだというのに、60 近
い温度にまで上昇している。元々タイヤに厳しいフォーチュンベル
のようなチームはもちろん、オフロードにセッティングを合わせて

いるチームにとっても鬼門となる。オフロードでも十分なグリップ力を得られるタイヤというのは、それだけ摩擦抵抗の少ない路面でもグリップ力を発揮するということになり、低温で効率良く機能を果たす。そしてその事実はずなわち、高温の路面による磨耗がより激しくなるという結論をも導くことになるのだ。そればかりか、あまりに高温が進むと表面が沸騰して気泡が発生（ブリストアと呼ばれる）し、即座のタイヤ交換を求められる結果にも繋がりがねないつまり、あの最も短いオフロードコースを選択していたら、この灼熱地獄に20周耐え抜くことは不可能であるということなのだ。

北嶋は陽炎に揺れるコース上を右に折れ、すぐに迎えるザックスカーブを左へと回り込む。そこから右に二回折れると、ホームストレートに戻ってきた。さすがにこれだけ小さなコーナーが続くと追い抜かれる心配はないものの、ストレート重視のマシンでは差を詰められてしまう。せつかく追い抜いたブルーフィッシュの紺地にマリンブルーのサメが描かれたマシンが、すぐ後方まで迫っていた。しかしそれもここまでだ。

ストレートを立ち上がるカブトガニは、まさに水を得た魚の如く直線を突っ走る。最大全長6.9キロメートルというタイヤに厳しい難コースも、これでようやく半分の10周を消化した。残り10周でどこまで順位を引き上げ、タイム差を縮められるかに、優勝とチャンピオンの可能性がかかっている。

『5位のサリスとは4秒差だ。2周後には追いつく』

「ああ、もう尻尾が見えてるよ」

ツクモの言葉を楽しそうに返し、北嶋はアクセルを踏み込んだ。

マイオールの乗るフランク・グランプリのマシンとサリスの乗るブルーフィッシュ・レーシングのマシンは、ほぼ変わらないペースで走っている。ホッケンハイムに着いてすでに13周を消化して尚この2台はポジションとペースに変わりがない。同じルートを選択

しているのも、変化が見られない要因の一つだろう。問題は、そのマシンの後方に北嶋のマシンが追いついているということである。ただモナコと違い、ルートを変えることによつて自らのペースを維持できるホッケンハイムという舞台は、北嶋にとつて優位に働く筈だった。この2台がそうであるように、同じコースを選択すればブロックをされる危惧も考慮に入れなければならないが、前の2台はいずれも細かいコーナーで真価を發揮するタイプのマシンである。直線で張り合つて負ける相手ではない。何より、そんなことは彼らも重々承知しているだろう。ブロックするために高速のロングコーズを選択すると思えなかつた。

「北嶋、ここが勝負だ。奴らがオフロードに入ったら全力でブツシユして2台まとめて抜け。下手に粘られるとこちらのペースを掴まれる」

『あいよつとおおおおおっ！』

インカムから思わぬ絶叫が迸る。あまりの大声に一瞬耳が遠くなつたような印象を受けるが、そんなことを気にしている場合ではないと思ひ直し、ツクモは現状の確認に入る。

「どうした。何があつた？」

『くそつ、危ねえな！』

「北嶋？」

『ああ大丈夫だ。サリスはウイングをやつたみたいだが　あ、駄目だ』

「駄目？　何が駄目なんだ？」

『ちきしょー！　振動が出てる。多分フラットスポットだ』

フラットスポットというのはタイヤに平らな部分が出来てしまったことを差す言葉である。アンチロックシステムを搭載しているF1のマシンでは滅多に起こらない現象だ。ちなみにこの現象が起こるとタイヤが振動を起こし、サスペンションなどの足回りに悪影響を与える。丸い消しゴムの一部を激しく擦つて平らにするとどんな風に転がるか、そんなイメージで考えるとわかりやすいだろう。む

るん、そういつたイレギュラーな振動は故障の原因に繋がり、最悪の場合はリタイヤという結末を迎えることになる。

ここでツクモは考える。これが全20周の内、18周目か19周目であったなら、このまま走らせるべきだろうと判断するところだ。ピットでのタイヤ交換は短く見積もっても15秒程度の損失となる。現在トップとのタイム差は15秒。緊急停止によって数秒は増えただろうから18秒程度は開いている。これに15秒足すと30秒以上の遅れとなる。フラットスポットの影響によってペースが落ちるとしても、数秒のロスなら安いと考えるべきだろう。単純に一つでも上の順位を目指すだけならともかく、優勝を目指すとなれば安易なピットインは選びたくない選択肢だ。では逆に、このまま走らせてみたらどうなるだろうかと考えてみる。残る周回数は6周、その間2秒のペースダウンをしたと仮定して12秒のロスだ。だがタイムロス以上に振動によるトラブルが発生することの方が問題である。どれほど後方に下がろうとも、ペースが落ちようとも、走り続けている限りは可能性が残る。リタイヤしてしまえば全てが水泡に帰すのだ。

問題は残り6周、この数字をどう判断するかである。

「北嶋、タイヤを用意する。入ってこい」

「マズくないか？」

「そのまま走つてもリタイヤを待つだけだ。あと6周ある。ニユータイヤで可能な限り追い上げるんだ！」

「……わかった！」

我ながら無茶な注文をつけるものと、ツクモは自分に感心していた。ただ、どちらを選ぶにしても、それを消極策として採用したくはなかったという内心は存在する。勝つためにベストの選択肢など存在しない。常にベターを選ぶしかないのだ。そしてだからこそ、勝利が決まるその瞬間まで周囲を煽るし、敗北が決まるその瞬間まで無様に足掻き続ける。

「片平さん、聞いてましたか？」

インカムの繋がる相手を切り替えて、ツクモはチーフメカニックへと呼び掛けた。

『ああ、すでにタイヤの準備は出来てる。なーに、ここはタイヤに厳しいサーキットだ。どこもそろそろ苦しくなってくるだろう。案内ニュータイヤに切り替えるのは正解かもしれないぞ?』

「そうですね。とにかく、そちらはお願いします」

『任しとけ!』

不安はある。しかし希望もあった。

確かに片平の指摘通り、このホッケンハイムはタイヤに厳しいサーキットだ。トラブルの直前にペースアップを指示したのも、タイヤが苦しくなってペースが落ちるであろうことを予想してのことである。そういう観点から見れば、15秒というロスタイムを抱えてでもタイヤを新しくするのは、それほど悪い選択肢ではないのかもしれない。むろん、このロスを埋めるためには限界を超えた猛プッシュが必要になってくるワケだが。

「さて……」

気を取り直してモニターへ視線を戻すと、佐藤から送られていたデータが画面上で自己主張していた。急ブレーキ後のマシンチェッカーの結果と問題のシーンを捉えたカメラ映像がセットになっている。とりあえず大きなトラブルがないことを大雑把に確認してから、映像を見てみることにした。

森を切り裂くように続くロングストレートを3台が縦に並んで走っている。シケインに突入するまでは安定した挙動を見せている。その内の2台がシケイン出口で右側に進路を寄せていき、別ルートへの分岐点に差し掛かった所でマイオールの後輪が流れた。その突発的な動きと急すぎる減速に対応し切れず、マイオールの後輪とサリスのフロントウイングが当たり、それでも直撃を避けるように左側へ膨らんだサリスのマシンが、結果的に北嶋の進路を妨害する形となってしまった。北嶋は辛うじて接触こそ避けたものの、急ブレーキをした際に後輪の片方がアスファルトを外れて横に滑り、スピ

ンするような格好で停止した。この時、発端となったマイオールはすぐに復帰、サリスがそれに続いて即座にペースを戻し、北島が少し遅れた。画面を見る限り、サリスのウイングは完全に破損し交換が必要な状況だが、マイオールには大きなトラブルが見られない。リアタイヤのホイール部分に運良くヒットした形になったのだろうと推測された。そして問題は北嶋である。彼は単に避けただけに留まらず、完全に停止している。このタイムロスを決して小さくない。順位の変動こそほとんどないものの、トップとのタイム差はかなり広がったことだろう。その上ピットインのロスが上乘せされるのだ。状況は極めて思わしくない。

「渋面を作ったツクモの視界に、新たな情報が割って入る。

「25秒差か……」

思ったよりも開いた差を噛み締めながら、背後へと視線を移す。そこには丁度ピットインしてきたカブトガニが、タイヤ交換を行うための大きなカバールを乗せられようとしているところだった。かつては人力によって効率的な作業を競っていたタイヤ交換の作業だが、F1ではどのチームも同じ条件でタイヤやウイングの交換が行われている。特に人員の少ないフォーチュンベルのようなチームにとつてはありがたいシステムだ。

機械仕掛けでも状況によってタイムに差が生ずるが、単純なタイヤ交換で4秒を上まわることとはほとんどない。今回のタイヤ交換も3・52秒で完了した。ピットロードでのロスタイムを考慮に入れると16秒から17秒程度の損失となる。単純に計算すれば、トップとのタイム差は40秒以上に広がったことになる。

『フェテルの後ろで戻った。10位だな。トップとは何秒ある？』

「トップとはよ」

言いかけて、ツクモは自分の目を疑った。状況を読み上げようと思った瞬間、表示が劇的に変動したのである。

『どうした？』

「……北嶋、とりあえず驚け。お前の順位は9位だ」

『フェテルも順位を上げてたのか？』

「いや、そうじゃない。トップとの差は33秒丁度だ。ちなみに現在のトップはシュマックだよ」

『え、パウルはどうしたよ？』

「リタイアだ。エンジントラブルらしい。しかも3番ルートの途中で止まっている。あそこは撤去できないゾーンだ。間違いなく通行禁止になる」

3番ルートは二番目に長いオフロードルートで、コーナーリング重視のマシンは大半が選んでいるルートでもある。先程トラブルを起こした二人が利用していたのも、その3番ルートになる。普段使っていたルートが使えなくなるということは、同時にペースが落ちることを意味し、しかもトップのマシンがリタイアしたことによって差異が劇的に縮まった。

『よっしゃ、風向きがこつちに向いてきたぜ！』

素直に喜ぶ北嶋とは対照的に、ツクモはどこか気味の悪いものでも見ているかのような顔で現状を無感情に報告し続けるモニターを睨む。これが何のため、誰のための流れであるのか、図りかねているからだ。北嶋の言うように、これは確かに風が吹いているということなのかもしれない。ただ自分達に向かって吹いている風が、必ずしも追い風であるとは限らないのだ。激しい向かい風ではないと誰が断言出来るのだろうか。

とはいえ、例えどのような風が吹いていようと、今の彼らに選択出来る戦術などたかが知れている。それも戦術監督などと銘打っている立場の人間からすると、情けないほど陳腐な策だ。

「北嶋、とにかく今はプッシュだ。何も考えなくて良い。あと6周全開でかつ飛ばせ！」

『了解！』

不安を胸に、流れる情報を見ながら歯噛みする。唯一の好材料は、とりあえずトラブルらしいトラブルを抱えていないことだけだった。

第6話 ホッケンハイムで芝刈りを

タイヤとは何であろうか、実生活においてそんなことを考える人間は極めて少数だろう。しかしレースを行う人間において、それは非常に重要な疑問である。その基本的な役割は大きく分けて四つある。一つ目はドライバーを含めた車体の荷重を支えること、二つ目は推進力や制動力を路面に伝えること、三つ目は舵を切って進路を制御すること、そして四つ目は路面からの衝撃を吸収することである。特にレースの場合、二つ目と三つ目が問題となり、そのためのタイヤ運用が必要になってくる。もちろん、その是非は直接勝敗にも関わることとなる。

かつてF1においては、ゴムというよりもガムテープを想像した方がわかりやすいというレベルのタイヤが使用されていた。熱を入れることで表面が溶け、それによって生じた粘着力が高い摩擦力へと繋がり、より高速でもマシンをコントロール出来るという仕組みになっていた。現在のF1では、オフロード区間やウェットコンディションといった路面状況に幅のあるコースを走破する都合上、そこまでのタイヤは使用されていない。しかしもちろん、そういった中でギリギリの摩擦力を獲得するための工夫は模索されていた。

タイヤという物体はその構造上、熱が入るまではグリップ力が弱く、その後最も良い状態を迎え、タイヤの磨耗が一定レベルを突破した時点から状態が低下していくというプロセスを辿ることになる。この一定レベルの突破というのは、同時にタイヤ交換を余儀なくされる状況と大抵等しく、インターバルとなるカーゴ移動のタイミンを迎えるまではタイヤ交換をしないというのが、昨今のF1の基本的な戦略だった。すなわち、周回数が終盤へと差し掛かるほどに、各マシンは無理な挙動をするだけの余裕がなくなることになるのだ。

実際、タイヤを新しくした北嶋の走りは、次元が違って見えた。森へと連なるロングストレートで、あっさりとフェテルに追いつ

き、シケインで煽るようなテールトゥウノーズを展開する。本来ならそのシケインの出口で別ルートへと逃れるフェテルだったが、トップを走っていたパウルのマシンが途中でリタイヤしてしまったため通行止めとなり、入ることは出来ない。そして、そこから続く大きな半径の右カーブでストレートに強い、しかもニュータイヤを履いたカブトガニを抑えるだけの余裕は、今のフェテルが操るロツソのマシンには残されていなかった。途中で折れる分岐点を待つことなく、簡単に追い抜いていく。

「よしっ、これで8位！」

順位もタイム差も、決して磐石の状態とはいえない。しかしそれでも、戦闘力の高いマシンで追い上げていく感覚は気持ちの良いものだ。小難しいことは何も考えずにプッシュ出来るというのも、北嶋にとってはありがたい。

「お、サリス発見！」

二つ目のシケインを抜けてしばらくの地点、最初の合流ポイントを迎えたところで、フェテルの前で復帰していたサリスが、2番ルートから現れる。先程抜いたフェテルの姿はまだ見えない。北嶋のペースとフェテルのペースには、この時点でかなりの開きがあると考えて差し支えない。しかし次の相手であるサリスは、北嶋と同じようにタイヤを交換している筈である。条件が五分のトップクラスのマシンでは、そう簡単には抜かせてもらえない。

(オフロードでも、直線なら！)

それでも北嶋は、勢いそのままにアクセルを踏み込んでいく。サリスは立ち上がりにも失敗でもしていたのか、その差は見る見る縮まっていた。ブロックすらされぬまま並走した二台のマシンは、その状態のままオンロード区間へと戻り、緩やかな右コーナーでアウトにいた北嶋が前に出る。見ている側にとっては極めて鮮やかな、爽快感のあるオーバーテイクシーンである。

ところが、左に折れて灼熱区間に突入した北嶋の表情はあからさまに渋い。昨日食わずにとっておいたショートケーキを食べようと

思ったら何故か天辺のイチゴだけなくなっていたかのような顔だ。

「……………なあ、ツクモ」

『どうした？』

「サリスって、何かトラブルでも抱えてるのか？」

アンドレ・サリスというドライバーは、比較的荒いレースをすることから『壊し屋』の異名すら持っている。むしろ相応の実力を認められていたからこそ、何年もドライバーという職業を続けてこられたワケだが、彼の父親が大手スポンサーの重役を勤めており、しかもそのスポンサーが彼の移動と共についてきていることから、彼をシートから外せない理由があると揶揄されることも多く、それがマシンやチームを省みないドライビングに繋がっているという噂もある。いずれにせよ、仮にもチャンピオンのかかったレースで、ポイントにおけるライバルに抜かれようとしている局面で、ブロックの一つもせずにアツサリ抜かれるなど、サリスというドライバーとしては極めて『らしくない』行動であると言わざるを得なかった。

『……………いや、今のところそういった情報は入っていないな。もっとも、ウイングを交換して見た目上は戻っているが、サリスは接触している。何かトラブルを抱えていたとしても不思議じゃないがね』

「そっか。まあいいや。これで7位、まだまだ行くぞ！」

『もちろんだ。ガブリエルとの差は3.5秒、ただし3台連なっているから、そう簡単じゃないぞ？』

「大丈夫、一台ずつ抜いていくさ」

トップとの差はまだ30秒を切った程度だ。あと5周で何秒縮められるのか、それによって最終サーキットでの展開が違ってくるだろう。いくら順位が上がったところで、タイム差が縮まらないことには意味がない。追い抜きに気を取られ、もたつくことは許されなかった。

「……厄介だな」

ツクモは呟かざるを得なかった。

ここ2周以上、北嶋の順位は変動していない。いや、順位の変動がないというだけなら、さほど大きな問題でもないのだが、トップを走るシユマツクとのタイム差が一秒以上開いていることは由々しき問題だった。

その原因は端的に言って前を走るガブリエル、フランク・グランプリのマシンにある。この程度の上位になると、いかに直線無敵のフォーチュンベルでも簡単に抜くことは出来ない。それでも直線速度に圧倒的な差異があれば強引にでも抜くことは可能なのだが、フランクのマシンはフォーチュンベルとデニスに次いで直線に強く、しかもガブリエルはチームメイトのマイオールと違ってストレートに強いセッティングを選んでた。そのためルート選択も北嶋と被り、直接ブロックを受けてしまう。こうなると、よほど上手く近付いて加速し、スリップストリームを活用しないとオーバーテイクは難しい。不可能ではないが、手間がかかることは間違いないかった。『くっそー。もうちよつとただけどなー！』

直線で並んだもののシケインの入り口で内側を押さえられ、渋々後方に戻った北嶋がボヤク。その声に悔しさは宿っているものの、あまり切迫した雰囲気は伝わってこない。現時点で重要なのは、あと何周で目の前のマシンを抜けるのかではなく、トップとのタイム差をどれだけ縮められるかという一点のみである。北嶋にその重要性が理解されていないなどという道理はないが、それでも目の前のマシンをどうにかしないことには始まらないという意識が強いのは彼の立場が現場に居るドライバーであるからだろう。

ツクモは頭の中で、この状況を打開する方法を模索してみる。

まずは違うルートを選択してみたが、今度は3台並んだ内の前2台が邪魔をする。しかも直線の少ないオフロードでは、そもそも抜くという行為を行うこと自体が難しい。むしろタイムを落とす結果となるだろう。それではと、今度は少しペースを落としてガブリエ

ルとのバトルを止め、ペースを落ち着かせることによりペースアップを図ったらどうなるだろうかと考えてみる。しかしこれも、3台が並んで走っている状況では大して意味がない。北嶋が後ろから突かなくとも、ガブリエルのペースは前の2台に抑えられてしまうだろう。結局、一台ずつでも確実に抜いていく方が間違いない。

最悪の事態も考慮に入れようと、モニターで現在の状況を確認したツクモが、小首を傾げる。抜かれたという状況がなかったにもかかわらず、北嶋の順位が8位に落ちていたのだ。

『ツクモ、サリスって今何位だ？』

「サリス？」

問われて咄嗟に下位を探すが見当たらない。しかしもしやと思いつつ上位へ視線を転じた瞬間、その名はアツサリと見付かった。そして、いつの間にか抜かれたのか記憶を辿り始めた矢先、佐藤から映像資料が届く。

その映像、生い茂る深い森の只中を疾走する一台のマシンを上空から捉えた映像に、さすがのツクモも驚いた。自分もF1における常識に囚われていないつもりだったがだけに、この発想に至らなかったことを意外に思うことは悔しかったのだろう。思わず指を噛むツクモからは、強い怒りに似た激情が感じられた。

「……………3台の前にサリスがいるんだな？」

『ああ、何か横から出てきたような気がしたけど』

「間違いない。奴は4位だ。最短コース、誰も選んでいない例のルートを抜けてきたんだ。特殊なウイングと完全オフロード仕様のタイヤを使ってるな」

ピットアウト後の挙動を見て気付くべきだったという言葉を、ツクモは危ういところで呑み込んだ。後悔するのはレースが終わってからのことだ。今すべきなのは、前を走る相手が増えたという純然たる事実と向かい合うことである。

一度大きく息を吸って深く吐き出すと、視界が広がるような感覚が起きる。このような時、自分が緊張や焦燥によって冷静さを失っ

ているということ、彼は経験から知っていた。

そして、ツクモが冷静さを取り戻したことを察したかのような夕イミングで、一つの資料が佐藤から送られてくる。それはサリスを中心に、トップのシユマツクと北嶋のタイムを区間ごとに比較したものだ。特に注目すべきは第4ルートの入口から出口までを比較したもので、北嶋とシユマツクが同程度のタイムで走っているのに対し、十秒以上短いタイムで走っていることだ。そこから先、灼熱区間とホームストレートを中心としたオンロード区間では四秒以上遅れているものの、全体としては五秒以上稼いでいることになる。ここまでの差異が存在しようとは、さすがにツクモも思っていない。恐らくサリスのマシンは、ある程度このルートを選択することを想定してセッティングがなされていたに違いない。そうでなければ、幅があるだけのモトクロスロードを高速で駆け抜けるなど不可能である。

もしも現状のカブトガニが同じルートを選んだらというシミュレーションを開始した瞬間、北嶋の声が邪魔をする。

『さつきもそうだったけど、前に出た割にはずいぶんアツサリ抜かせるな。ブロックする気配もないぞ』

モニター上で確認してみると、合流ポイントから僅か二つ目のコーナーで1台に抜かれている。いくらショートカットで稼げると言っても、築いたマージンをこつアツサリ譲ってしまうことには違和感を覚える。ここから約2周、それでホッケンハイムは終了するのだ。ガチガチにブロックをして守る方が、むしろ自然であるように感じられる。

(いや、それが出来ないくらいギリギリのセッティングを組んでいると考える方が妥当か？ それとも何か他に、例えばタイヤを温存するような理由でもあるのか？)

オフロード用のタイヤは柔らかく、オンロードには向いていないばかりでなく磨耗も早い。しかもタイヤを痛めるために存在しているような灼熱区間まで潜り抜けなければならないという都合上、そ

う長く走り続けることは出来ない。とはいえ、無理して1周や2周は我慢する程度のことなら可能な筈だし、そうして然るべき局面でもあるだろう。

『うわおっ！』

悲鳴にも似た北嶋の声がインカムから響く。彼の順位は相変わらず変わっていない。ただ、サリスの順位は彼の直前、7位にまで後退していた。

「どうした？」

『いや、今まで素通りさせてたのに、オレの時だけブロックしてきやがった。前の時やけにアツサリ抜いたもんだから、気に入らなかつたのか？』

「そんなこと」

ある筈がないと言いかけたツクモは、不意に一つの可能性に気付く。いや正確には、サリスのブロックが気付かせてくれたものなのかもしれない。

『まあとにかく、ホームストレートに入ったらさっさと抜いてやるな』

「いや待てっ。抜かなくて良い！」

『は？ ツクモ、何言ってるんだ？』

「……一つ聞くぞ。優勝するつもりはあるか？」

『そりゃもちろんだ』

「なら、少しくらいの危険なら乗り越えてくれるよな？」

『何が言いたい？』

「次の周、サリスの後にくっついてショートカットルートを使う。本来ウチのマシンはオフロードに強くないが、サリスの通った道をそのまま辿れば、比較的安全に抜けられる筈だ。幸い、タイヤの状態にもまだ余裕がある」

こうなると、あのタイミングでのタイヤ交換も決して無駄ではなかつたのかもしれない。

「もちろん、最終的な判断はお前に任せる。現場で無理だと判断し

「たらやめ」

『面白そうだな』

呟きと含み笑いが、ツクモの発言を遮る。

「言つとくが、かなり危険な賭けだぞ？」

『だから面白いんだろーが。それに、優勝するつもりならこの程度のことは成功させておかないとな』

ツクモと同様、北嶋も前を向いて走っている。何よりもそのことが、チームの勝利を目指す戦術監督として心強かった。

いずれにしても残るは2周のみ、先頭を走るシユマツクもタイヤの状態が苦しいのかペースが上がってこそいないものの、三十秒という差異に大きな変化はない。これを何秒縮めて最終サーキット

シルキュイ・ド・スパリフランコルシャンへと向かうことが出来るのか、極めて大きな岐路に立っている。だからこそツクモは冷静であり続け、北嶋は熱さを維持し続けなければならないのだ。

ふと見上げれば、1台の重力ホバーが何かを待つように空の一点で止まっている。その下には、ホッケンハイムの深い森がある筈だった。

『おおつと、サリスに続いて北嶋も第4ルートに突入っ。これは無謀なチャレンジかあ！』

そろそろ次のサーキットへ向かう頃合のため、シートに腰を下ろしての観戦をしていた三人が、前のめりになつて腰を浮かせる。その表情は驚愕というより恐怖に近い。とはいえ、オンロードのロングストレートを最も得意とするカプトガニが、未開にすら見える森林を駆け抜けるオフロードルートへと突入したのだ。このチームを良く知る者であればあるほど、この事実を意外に思うのも無理はない。

「間違つたんじゃ、ないですよね？」

「さすがにそれはないだろう。ツクモくんの指示か北嶋くんの独断

か、いずれにしても優勝するためには必要と判断したのだろうな」

朱里の問い掛けに、総合監督の富田が応じる。レース中は傍観者でしかない彼だが、それでも現状が異常事態であることは明確に理解していた。握り締めた拳が、じつとりと汗ばんでくるのがわかるほどだ。

「ホームストレートで抜かなかつたのは、このためですね」

秘書の高千穂が逸早く冷静さを取り戻し、シートに座り直しつつ分析を加える。

「そっか。わかってやってるんだ。そっか……」

とりあえず突発的な事故でないとわかったのか、逆立っていた朱里の柳眉も落ち着いていた。途端に力が抜けたようで、崩れ落ちるようにシートへと沈む。

「細かく折れる森の道を、右へ左へとサリスのマシンが揺れ動く。ジリジリと引き離される北嶋は、そのテールランプを追いかけるのがやっとだ！」

「さすがにこの状況では、カブトガニに分はありませんね」

実況の熱さと解説の冷たさが一段と激しい。

「それにしても島宮さん、サリスの動きは後方から付いてくる北嶋を警戒しているようにも映るのですが？」

「これは警戒しているのではなく、単に安全なルートを選択しているだけだと思います。他のオフロードルートと違い、この第4ルートは全く整備されていません。そのため木片や尖った小石などはもちろん、大きな段差や自然に穿たれた穴も放置されているような状況です。だからこそ、どのチームもこのルートを選択しなかったのです」

「しかし、サリスは実際に走り抜けましたよ？」

「その通りです。ですが、それは彼が相応の装備をしているからであって、偶然ではありません。このスローモーション映像を見ればお分かりいただけると思いますが、このフロントウイングは極めて特殊です。明らかに空力パーツとは思えない部分が複数存在してい

ます。恐らくはこれで伸び過ぎた草を刈ったり、障害物を弾いているのでしよう。もしかしたら、センサーやシールドも備えているかもしれません』

『つまり、路面状況を把握し、それを改善しながら走っているということですか。ずいぶん思い切った作戦を立ててきたようですね』

『ただ、タイヤまで含めてかなりオフロードに偏った装備のため、オンロードでは全くタイムが伸びません。それでも毎周五秒以上縮めているのですから、作戦としては成功と言えるでしょうね』

『なるほど。しかし、そんな状況に明らかかなオンロード仕様の北嶋が飛び込んで大丈夫なのでしょう？』

『もしも単独で飛び込んでいけば、確実にマシンやタイヤを痛めているでしょうね。それどころかリタイヤしていたかもしれません。そしてだからこそ、ホームストレートで抜かなかったのだらうと思います。サリスの後方を走ることと安全な路面を選択出来るだけでなく、障害物を取り除いてくれるのです。それでももちろん危険な賭けには違いありませんが、勝算はずいぶん違ってくるでしょうから』

『さすがは北嶋 いや、この場合は戦術監督ツクモの策でしょう。いずれにしても、もうすぐ森を抜けます！』

深いホッケンハイムの森を、細かな枝葉撒き散らしながら2台のマシンが抜け出てくる。綱渡りをするような状況の中であったにもかかわらず、2台の差は一秒程度しか開いていない。そして飛び出した2台のすぐ後方には、すでに加速を開始していた青地に白いラインの入ったフランク・グランプリのマシンが迫っていた。

『何とマイオールの前で合流したっ。8位から4位にジャンプアップだ！』

「よっしゃ！」

朱里が再び立ち上がる。しかし今度は先程と違い、その表情には明確な喜びだけが宿っている。

『しかし問題はここからですね。サリスと違って北嶋のマシンはあ

れほどのオフロードを想定していないでしょう。特にタイヤへのトラブルが起きた場合、リタイヤの可能性すらあります。とはいえ残すは1周のみ、この局面でピットインは出来ません」

「サリスを先頭に3台が数珠繋ぎに灼熱区間へと入って行くつ。この時点でトップを走るシユマツクとのタイム差は……20秒ですつ。これはかなり縮めてきました！」

「とりあえず走りを見る限り、大きなトラブルはなさそうですね」
大きく曲がり込むコーナーの続く灼熱区間を抜けた瞬間、加速と同時にカブトガニがレコードラインから外れる。

「おつとお、北嶋加速つ。マシンの好調を誇示するかのようサリスを猛追つ、そして今……並んだあ！」

ホームストレート半ばで抜け出た北嶋は、そのままイン側を抑えて最初のコーナーへと消えて行く。そして見る見る差を広げながら、得意なロングストレートへと突き進んでいった。その途中にある最初の分岐点 第4ルートへ入口には見向きもしない。

「どうやら北嶋がショートカットを利用するのは一周のみのようです。もう一周行けば、トップとの差をかなり縮められるように思っているのですが？」

「いえ、正しい判断だと思います。北嶋のマシンにとって、あのルートはあまりに危険が大きいですし、それにもかしたら」

「おつと2台連続リタイヤだつ。一体何があつた！」

「画面が切り替わり、森の中に頓挫しているマシンが映し出される。2台が2台共、似たような場所で停止を余儀なくされていた。

「そうです。こうなってしまった場合、ただでさえ狭いルートが更に狭まり、下手をすれば通り抜けることすら不可能になってしまいます。何の準備も無しに抜けられるほど甘いルートではないのですよ。もちろん、実際に抜けている二人がいる以上、その確率は0パーセントではありませんが」

「しかしこれは、やはりと言いますかりタイヤが確定した時点で第4ルートは通行が禁止となりますが、すでに入っているサリスは潜

り抜けるしかないっ』

順調に森林の間を走っていたサリスのマシンが、大きな障害物を前にして急減速する。

『……やはりてこずっていますね。極めて自然に近い環境ですから、上空からの見た目以上に走れる場所は少ない筈です。そういったことまで考慮に入れたマシンであるならともかく、そうでなければ抜けることすら不可能でしょう』

何とかリタイアしたマシンを避けつつ合流ポイントへと加速を始めるサリスだが、失ってしまったタイムは決して小さくない。このルートのリスクを考えれば、短縮できない時点で失敗である。

『二つ目のシケインを抜けた北嶋が加速してくる。どちらが早いんだ。北嶋かサリスか、ここで前を抑えれば残る中低速の灼熱区間のみ、順位はほぼ確定しますっ。と、ここでサリスが森を抜けるっ。北嶋は……北嶋が来たあ！』

合流を果たしたサリスが加速を開始した刹那、その左側を風のように北嶋が疾走していく。

「やったあ！」

ピョンピョン飛び跳ねる朱里を、二人の大人が笑顔で眺めている。画面上にいる北嶋がピットに戻って来次第次のサーキットへ出発することになる。そろそろ座っていないければならない頃合だ。しかし今は、そんな注意を口にするこゝと自体が野暮である。

『これで3位、トップとのタイム差は18秒にまで縮めました。いよいよ射程圏内、北嶋の優勝、そしてチャンピオンロードがこれで見えてきましたっ！』

まだ道は半ば、何一つ終わってはいない。

だからこそ、希望は大きく膨らみつつあった。

第7話 嘆きの壁

スパルフランコルシヤンは、F1時代からドライバーの評判が高かったサーキットの一つである。大きな特色があり、総合力が試され、かつ極めてチャレンジングなコースレイアウトを有している。そしてF1において、このスパルフランコルシヤンというサーキットは更なる進歩を遂げていた。F1というカテゴリーが失われて数世紀、どのサーキットもまともな状態では保存されていなかったのだが、モンテカルロは新しいセクションを追加された以外はそのままの形で復元され、ホッケンハイムは改修された跡を正規のサーキットとして復元された。どちらも、原型に大きな変化はない。しかしここ、スパルフランコルシヤンだけは、大規模な改修が行われていた。

(さて、こりやどうしたもんか……)

ほぼ頭上にあるデジタル表示を見ながら、北嶋はヘルメット内で溜め息を漏らした。2周目を迎え、自らのラップタイムが見間違いでなかったことを改めて実感する。この1周で前を走るハミルとの差が0.2秒開いたことに大きな驚きは感じないが、後ろから追いかけてくるサリスとの差が0.3秒縮まっているのは由々しき事態だった。コレだけを見ても、彼のラップタイムは周囲比べて遅れていると言わざるを得ない。

「ツクモ、この一周でトップとはどのくらい離れた？」

「0.5秒だ」

予想はしていたが、優勝を狙うフォーチュンベルにとっては極めて喜ばしくない事実である。しかも今回は、突発的なトラブルや不利な状況がある訳ではない。彼らとしては精一杯走った上で、タイムが伸びていないのである。

ただその理由に関しては、すでにある程度わかっていた。

右へとハンドルを切りながら、まるで奈落の底へと吸い込まれて

いくような感覚に陥る。ホームスタンド前を走り抜け、かつてラ・スルスと呼ばれたコーナーの名残は、もう微塵もない。鋭角なコーナーは姿を消し、代わりに作られたのが渦を描くように伸びていく複合コーナーである。それは立体交差になる寸前で鋭角な左コーナーへと変じ、このサーキット最大の名物でもあるオー・ルージュへと伸びている。

赤い水と名付けられた細かいコーナーを繋いだ上り区間は、ドライバーの度胸を試す場として有名だ。F1当時から80メートル近くあった急勾配だが、低く削られた新しい最下層から120メートル、高低差は40メートル近くにもなる。単純に度胸だけではなく、アクセルワークからマシン性能まで測られる難所へと変じている。ちなみに名前の由来は近くを流れている川が鉄分を含んでいるため赤く見えることからきている。その光景は今でも健在だ。

そしてこのオー・ルージュをいかに効率よく、かつ高速で抜けるかによって、続くロングストレート ケメル・ストレートでの伸びが決まってくる。ここも緩やかな上り区間となっており、この二つの区間で100メートル以上ある高低差を一気に駆け上ることになる。特にオー・ルージュは『壁に突っ込むようだ』と評されることが多く、前後ではなく上下のGと戦う必要があるという珍しいコースでもあった。

「くそつ、ここで伸びないなんてよ!」

本来、ストレート区間である筈のオー・ルージュからケメルへと連なる区間は、フォーチュンベルにとって有利な区間の筈だった。

しかし今、その直線区間こそが足を引っ張る要因となっている。最高速にもセクションベストにも、北嶋の名前はなかった。

『やはりエンジンだな』

これまで最高速を記録してこれたのは、ウイングがないことによる空気抵抗の少なさが要因である。それは決してエンジンパワーの功績ではない。むしろその非力を、抵抗の少なさで補ってきたのである。しかしこの長い上り区間は、否応なくエンジンパワーを要求

してくる。予算の都合もあり、非力なエンジンを選択するしかなかったフォーチュンベルにとって、これはあまりに酷な要求だった。「でもシミュレーターじゃ、そんなに差はなかったぞ。こんなに伸びなかったか？」

1キロ以上続くケメルストレートを抜け、山道区間とも言うべき下りのオフロードに突入する。細かく、そして厳しいコーナーの続く低速区間だ。右左右と曲がり、回り込むような右コーナーを抜けると、幅の広い中速区間へと入る。

『いや、シミュレーターは正しいよ。タイムはそう変わっていない。』
「つてことは……」

『相手のエンジンパワーが上がっているということだ。ウチらはGとのバランスを崩さないために、エンジンにはあまり手を加えてないからな。その差が出たのさ』

すなわち、ウイングによる抵抗を何とかフォロしようとしてエンジンでカバーしようとした分、上りのコースで効果を発揮したということになる。カプトガ二との間にストレートスピードの差がなければ、それほどの強化が行われなかったかもしれないと考えると、少しばかり皮肉めいた話である。

「……他にないのか？ タイムを縮める方法が」

激しい横Gで滑るマシンを制御しながら、二つ続く左コーナーを越えていく。更に訪れた右左右と続くコーナーで重力制御を細かく行ってはみたものの、さほど大きな効果が出たとも思えない。重力制御はあくまでウイングの代わりにダウンフォースを得るための道具でしかなく、決して万能な加速装置ではないのだ。

『今は難しいな。とにかく現状のペースを維持して、何とかチャンスを待つかない。しばらくは頑張ってくれ』

「あいよ」

気楽に返事をしたものの、北嶋の内心は穏やかではない。どんな無茶な作戦であろうと躊躇しないツクモが、無策で耐えろと言っているのだ。これは極めて思わしくない状況である。

(待つのは嫌いなんだよな)

大きく右に回るコーナーを抜けた所で、オンロードへと戻ってくる。大きく左へ曲がりながら僅かに下っているため、ようやくカブトガニが『らしい』走りを許される区間でもある。それでも二つ続いている高速コーナーは半径がきつく、その後を訪れる大きなシケイン　バスストップシケインはブレーキに厳しく、マシンへの負担が増大していく。しかしこの区間だけが唯一他のマシンに比べてタイムを稼げることから考えると、無理をせざるを得なかった。ここでのマージンがなければ、ラップ毎のタイム差はもっと広がっている筈だ。

3周目に入ったところで、後方の様子を映し出すサブモニター　通称ミラーにサリスのマシンが映り込む。攻めることを得意とする北嶋にとつて、その事実は決して嬉しいことではない。ただもちろん、この程度の状況で諦められるほど、伸ばした手は短くなかった。

ストレートに強いフォーチュンベルのカブトガニ、その真価が今、試されようとしている。全長7.53キロメートル、標高差120メートルにも及ぶ難コースは、まだ15周残されている。

その結末は、まだ見えない。

状況に変化が見られないままに、2周が過ぎ去った。いや、変化がなかったのではない。彼らフォーチュンベルにとつて、好転していなかったというだけの話だ。

(トップのシユマックと2位のハミルからは0.5秒ずつ離され、後方のサリスからは0.3秒ずつ縮められる展開か……: 良くないな、これは)

ペースそのものを見る限り、大きく差を開けられるほどのレベルではない。相応のペースを維持して先頭集団の只中にあることは間違いない。ただ、それだけでは優勝へ歩み出すことは難しい。

現状、敵側のトラブルを待つ程度の消極策しか打てない以上、勝つための明確なロジックを組み上げることは難しかった。

(この状況では動けない。ならば……)

目の前のモニターで刻一刻と推移するタイムと周回数を眺めながら、ツクモは現状の整理を開始した。

まず重要なのは目標である。もちろんレースを走るからには優勝を目指すのはどのチームの誰であれ当然のことだし、出来る優勝を逃すほど無欲でもない。ただ、状況によっては優勝以上に価値を持つ入賞が存在することもある。

例えば北嶋とポイントリーダーであるシュマックとは7ポイントの差がある。もし仮にシュマックがリタイアしてしまった場合、完走によって得られる1ポイントを引いた6ポイントを稼ぐことが、最低限銀河チャンピオンを獲得できる条件となる。すなわち6位というボーダーポジションを死守することが、何よりも重要視されることとなるワケだ。もちろんこの場合、下位にいるハミルやマイオールといったドライバー達の獲得ポイントにも気を配る必要があるのは言うまでもない。いずれにしても何より重要なのは、このレースを何位で終わるかということではなく、ドライバーズランキングに何ポイント加えることが出来るのかという一点のみなのである。本来なら、チームとしてのポイントであるコンストラクターズ争いにも関係してくることなのだが、1台しかエントリーしていないフォーチュンベルがコンストラクターズタイトルを獲得することはない。だからこそ尚のこと、北嶋のポイントはより重要性を増すとも言える。

そして現在、ポイントリーダーであるシュマックが先頭を走っているというのは、彼らフォーチュンベルにとって極めて問題のある状況であると言える。1位と2位のポイント差は7ポイント、北嶋が優勝してシュマックが2位ならば、ポイントの上では並ぶことになる。そしてこうなった場合、優勝回数が多い方が上位となる。北嶋はこのレースを含めて6回優勝することになるので、優勝3回の

シユマツクより上位に来ることとなる筈だ。一見すると希望を抱きたくなるような状況だが、シユマツクをコース上で抜いての優勝がどれほど難しいのか、今まで同じ土俵の上で戦ってきた彼らには痛いほどわかる。そして、それが出来なければ銀河チャンピオンが獲れないというのが、今の彼らに突きつけられた現実でもあった。

（せめて、タイムを縮めることが出来るなら良か）

すでに20秒を越えたトップとのタイム差を確認した瞬間、状況の変化に気付く。每周0.5秒ずつ広がり始めていたタイム差が、一気に2秒以上縮まっているのだ。

（北嶋のペースが上がった？ いや、ハミルやサリスとの差は相変わらずだ。つまり、シユマツクに何かあったということか）

一時的なタイムの変調は、決して珍しいことではない。しかし今の状態で、タイムを故意に落とす理由はなかった。まして相手はサイボーグと揶揄されるシユマツクである。自らのミスでコースアウトしてタイムを落とすなど、そうそう信じられることではない。

「佐藤さん、シユマツクのここ3周分のデータを寄越して下さい」
すでに佐藤も気付いていたのだろう。ツクモの台詞が終わるより早く、眼前のモニターに測定点毎のタイムが三つ並んで表示された。やはり予想したとおり、コースアウトしたような大きなタイムロスはない。少しずつ生じたロスが積み重なって出来上がった一秒差だった。

「北嶋」

インカムを操作し、相棒を呼ぶ。

『どうした？』

すでに5周目に突入し、相変わらずの悪戦苦闘を繰り広げている北嶋の声に余裕は感じられない。前は見えなくなり、後ろは迫り来るといふ状況は、モニター上で経緯を見守るより遙かに過大なストレスとなっている筈だ。

「シユマツクにトラブルだ。多分、下の方のギアが幾つか死んでいる。次の周にはハミルが追いつく、そうなればチャンスも出てくる

ぞ。諦めず前へ前へ、だ」

『はいはい、最初からそのつもりだよ』

時代が変わっても、ギアに関するトラブルというのがなくなることはない。完全な故障というのは少なくなつたが、一部が死ぬ

すなわち入らなくなることは決して珍しいことではなかつた。更に言えば、同じチームの片方にトラブルが出た場合、もう片方にも同じようなトラブルを生ずることが多い。シュマツクのチームメイトであるアインのマシンは、ギアボックストラブルによってコントロールを失い、リタイアしていた。

「風向きが変わつたんだ。勝つぞ！」

『当然だっ』

とはいえ、シュマツクのペースが落ちたからといって何もかもが望ましい方向に進むとも限らない。むしろそれは、更なる混沌を呼び込む始まりに過ぎないのかもしれない。

そんなことを思いつつ、張り付いた前髪を人差し指で掬いながら空を見上げる。そこには丘陵と頂の向こう側から、重く厚い雲が広がりがりつつあつた。

実況が白熱する。

『おおっと、いよいよハミルがシュマツクのテールを捉えたっ。二人の差は0.5秒、仕掛けるか、凌ぐか、オー・ルージユを駆け上つたところでどう出るっ。ハミルが右から左へ大きく振つてスリップストリームから抜けたぞ。並ぶ並ぶっ、しかしシュマツクも直線は伸びるっ。簡単には行かせないっ！』

固唾を呑んで見守る中、トップの2台がデッドヒートを繰り広げていた。タイムが落ちたとはいえ、シュマツクのスピード自体に翳りが出ているような印象は受けない。もちろん、トラブルを抱えていることはタイムが証明しているし、直線でのパフォーマンスがマシンの全てではない。しかし理由はあれど、シュマツクの技術と迫

力が今の走りを支えていることは疑いようがなかった。

『さすがはシユマック、インをキツチリ抑えます。ハミルは、このブロックを攻略出来るのかっ?』

『ライン取りの上手さはさすがですね。それに、どうやら高速走行には支障がないようですから、追いつくことは出来ても抜くことは難しいでしょう。デニス・レーシングはフォーチュンベルに次いで直線速度の速いマシンですが、それでもカバロのマシンをパスするにはスリップストリームを必要とします。オー・ルージュからの立ち上がりを含め、技術や性能ばかりでなく、度胸や運という要素も必要になってきますね』

『チャンピオンになりたければオレを越えてみると言っているような感じですね。それにしてもカバロのマシン相手にスリップストリーム必須とは、あまりにも高すぎる赤い壁だっ!』

スリップストリームというのは、レースにおいて追い越し(オーバートイク)を行うための基本的なテクニックである。F1に限らず高速で走行する物体の後方は気圧が低くなり、同時に本来存在している前方からの空気抵抗が少なくなる。その領域に後方からマシンを寄せることにより、気圧が低いことによる吸引効果があるばかりでなく、前方からの空気抵抗が少ないためにマシンパワーに余裕が生まれる。この余裕を利用して追い抜くことになるのだ。特にF1のような高いカテゴリーになればなるほど、技術やマシン性能のみで抜くことが難しくなり、この技術が多用される。ただ、ウイングに受ける風が低減することからダウンフォースの管理が難しくなったり、そうさせないための乱気流を発生させるウイングを使用しているマシンもあるので、現在では万能と言えるほどの技術ではなくなっている。

そして、特にシユマックの駆るカバロのマシンは、抜きにくいこととで有名だった。

『しかし北嶋にとってはチャンスですよ』

解説の指摘に合わせたかのようなタイミングでカメラが切り替わ

る。

『その通りですっ。前の周では12秒あったタイム差が、7.8秒！ 4秒以上縮めていますっ。残るは11周、確実に追い付きます』
『先頭の2台が争ってくれば、自然とタイムは伸びなくなりますからね。それに、北嶋選手のタイムも少しずつですが伸びています』
『北嶋自己ベスト更新っ。後方サリスとの差も2秒から縮まりません。いよいよエンジンがかかってきたのかぁ！』

ここで再び、ケメルストレートに入った先頭の2台が映し出される。すでに並んでいる2台のマシンが、最大のオーバーテイクポイントを駆け抜けていく。先程の周回と違い、十分に引きつけてからアウト側へ抜け出たハミルのマシンは、フロントウイング一つ分りードしている。

『アウトから行くつもりかっ。しかしこの接近戦は厳しいっ。インを抑えたシユマックがブロ』

『ブロックという単語が完結しない。いや出来なかった。』

『シユマック、引きましたね』

『島宮さん、今のは？』

状況の見極めは勝負の世界に踏み止まる者にとって、間違いなく重要なスキルである。しかし同時に、どんな状況でも優位を譲らない頑固さが求められる時も確かにある。現状で、シユマックとハミルのラップタイムには2秒以上の違いがある。もし抜かれれば、その時点で優勝を諦めることになるのは必至な局面だ。優勝するつもりなら、ここは絶対に引いてはならないところである。残る11周、可能な限りブロックに徹すべき状況だ。

『抜かれる判断をしたというよりは、無理をしなかったように見えますね。もしこのまま走っていれば、次の周にはハミルの後方に北嶋が追いついてくるでしょう。その状況を避けたかった、ということなのかもしれません』

『確かにハミルに抜かれても縮まるのは7ポイントですから、12ポイント離れているシユマックにとっては問題のない相手でしょう

が、すぐ後方につかれるよりもワンクッション挟んだ方がブロックしやすいのではないですか？」

「確かに、1台になら抜かれても大丈夫という安心感があります。ただ、ブロックする相手が2台になることによって、ドライバーの負担は大きくなりますし、突発的なアクシデントが起こる確率も増えることとなります。シユマックとしては、確実にブロックできる状況を作った方が間違いないと考えたのかもしれないですね」

「なるほど。とはいえシユマックのレースペースが落ちたことは事実、北嶋にとつてチャンスであることに変わりはありません。オフロード区間を走り終えて、シユマックと北嶋のタイム差は5・1秒まで迫った！やはり苦しい、苦しいぞシユマック！」

右コーナーを立ち上がって加速を始める深紅のマシンの後方に、ウイングのない白いマシンが映り込む。まだ距離はあるが、確実にミラーには姿を晒している筈だ。

「よしよしよしっ！」

鼻息も荒く、拳を振り上げた朱里が立ち上がる。

仮にもお嬢様学校に通う淑女としては、あまり誉められない応援風景である。もし母親がここに居たら、確実に彼女を叱責していたところだろう。だが、同席している二人が彼女を止めることはない。それは彼女の親ではないからというだけでなく、同じ気持ちを抱いているからに他ならない。本音を言えば、感情を素直に表現できる彼女が羨ましいほどだった。

「ホームスタンド前から漆黒のマシンが螺旋階段へと向かう。その差は何と3・8秒、いよいよ迫ってきた。もうすでにシユマックの視界にはカプトガニが大きく映っている筈です。残り10周、ここが正念場だあ！」

グルリと回り込んで大きく下り、鋭角の弧を左回りに描いて立ち上がる。ここから先はオー・ルージュとケメルストレート、1・5キロ近く続く高速区間だ。

「ここからはカプトガニの本領発揮、得意なスト いや、差が開

くっ。オー・ルージユで北嶋が遅れたあ！ ケメルストレートでもジワジワと差が広がっていく。スリップストリームにすら入れない。まさかの直線失速だっ！』

『これは……エンジンでしようかね。それとも、高速系のギアに何かトラブルを抱えているのかもしれない。ただ、ラップタイムは刻んできています。大きなトラブルではないと思いますが』

『北嶋黄色信号！ ここまで来たのに赤い壁を越えることが出来ない！』

『あるいは、シュマツクは気付いていたのかもしれませんが。ストレートで北嶋に抜かれることはないということ。だからこそ、余計なトラブルを避けて一対一の勝負に持ち込んだのかもしれませんが。低速コーナーの続くオフロード区間に入って、2台の差が詰まる。しかしそれは、物理的な距離が縮まった以上の価値を有してはいなかった。シュマツクの駆る深紅のマシンには、いささかの動揺も見られない。』

『何ということだっ。チャンピオンへ至る絶対条件は帝王シュマツクの攻略しかないというのに。この赤い壁は今の北嶋には高過ぎるのかっ！』

「まだ大丈夫！」

強く拳を握った朱里が、誰にともなく言い聞かせる。

『まだ9周半あります。プレッシャーをかけ続ければ、いずれ綻びが生ずるかもしれません。焦りは禁物ですよ。北嶋選手は、こんな時こそ冷静に走ってもらいたいものですね』

『とはいえ、この隙にとトップに躍り出たハミルが逃げるっ。シュマツクにとっては問題のない相手でも、5ポイント差しかない北嶋にとっては問題のある相手だっ。早々にシュマツクをかわさなければ、ハミルに追いつけなくなります！』

『恐らく、それもシュマツクの狙いの一つでしょう。焦りが軽率な判断と行動を生み、ミスが増えることになります。少なくとも現状では、逃げるシュマツクよりも追う北嶋選手の方が大きなプレッシ

ヤーと戦っているでしょうね』

「さっちゃん……」

不安そうに呟く朱里は、何かを耐えるよう口を引き結び、モニターへと視線を集中する。今の自分に出来ることが、それしかないと嘆くかのような表情だ。

画面内の北嶋は、素人目にも判るレベルでシユマツクを追いたて、可能な限りのプレッシャーをかけている。しかしその圧力を、時には受け、時には流して、シユマツクは飄々とレースを続けていた。この辺りはやはり、百戦錬磨のツワモノといったところなのだろう。それほど詳しくもなければのめり込んでもいないと自負している朱里でさえ、その程度のこととはわかる。そしてそれは、北嶋の精一杯がどうやっても赤い壁を越えられないという、極めてわかりやすい幻想へと繋がった。

信じたいという気持ちに偽りは無い。だがそれでも、どうしようもないことというのは現実に山ほど存在する。

『またもやオー・ルージユで離される！ ケメルでスリップは……駄目だつ。差が縮まらない！ 残り9周、この絶望はチェッカーを受けるまで終わらないのかっ』

どうしようもないと思った時、どうすれば良いのかなど朱里にはわからない。ただ、諦めるという選択肢だけは、最後まで選びたくなかった。

『……おや、北嶋選手が遅れ始めましたね』

解説の指摘通り、オフロード区間に入った2台の間隔が広がっている。

『小休止でしょうか？』

『あるいは、タイヤかブレーキに限界が来ているのかもしれませんが。ストレートに強いカブトガニが、ストレートで伸びないという状況の中であれほどの猛プッシュを見せたのです。負担がかかっても不思議ではありません』

『何ということだつ。北嶋本人ばかりかマシンも満身創痍、傷だら

けの大和魂に勝機は訪れるのかっ！」

「まずは走り続けることです。今はそれしかありません」
的確過ぎる解説が、今の朱里には腹立たしい。

苦しそうに、辛そうに走る様がモニター越しにでも痛々しく映る。それでも尚、喰らい付く姿勢だけは決して崩そうとしていなかった。北嶋はまだ、何一つ諦めてはいない。そう実感することが出来た。

ただ、このままでは何一つ変わらない。それは彼女にもわかる。しかしどうすべきかなど、思いつく筈もなかった。所詮は傍観者の一人ではないという現実が、こんな時にはもどかしい。そんな気持を紛らわそうと、何か一つでも自分に出来ることをと見回した彼女は、分厚い強化ガラスによって区切られた四角い窓で視線を止める。

そこに残された一条の痕跡が、変化の兆しだった。

第8話 スパウエザー

屋根のない急増スタンドに、ポツポツと赤や青の花が咲く。

『今年もやはりスパウエザーは健在ですつ。残り8周を迎えたところで、ホームスタンド周辺に雨が落ちてきました。予報では五分以内に本格的な雨になると出ています』

『標高の高いケメルストレートの終わりは、すでにウエットコンディションになっていくようです。全体としてはまだドライですが、慎重にドライビングしないと危険な状況ですね。局地的に路面状況が変わってきています』

解説の言葉通り、メインスタンド周辺の路面はまだ乾いていたが、画面上の路面はすでに色が変わっている。かつてのF1と違い、ドライでなくなつた瞬間に走れなくなるほど極端ではないが、それでもラップタイムの低下は避けられない状況だ。

『このまま走り切るのは難しい、ですよ？』

『今のまま最後まで走れば問題はないでしょうが』

『おつと駄目なあ！ レ・コームの入口で一台スピノフ。インデイアナフォースのマシンだつ』

『何とか復帰しましたが、間違いなくコンディションは悪化していますね』

『この終盤に来てまさかのスパウエザー！ 勝利の女神の悪戯かつ、あるいは勝者に与えられる最後の試練なのかつ、いずれにしてもこの状況を乗り切らなければ栄光のチェッカーはありません！』

スパルランコルシャンは山間部に存在し、天候が目まぐるしく変わることがある。またコース全長が長いこともあり、仮に雨が降つたとしてもドライとウエットが混在することすらある。この『スパウエザー』と呼ばれる天候の悪戯が、スパルランコルシャンというサーキットの大きな特色の一つでもあった。元々チャレンジングなコースである上に判断の難しい局面を突きつけてくるため、番

狂わせや突発的なアクシデントが起こりやすく、ドライバーの腕もチームの力量も問われることになる。

『お、この状況に早くも数台のマシンがピットイン！ 後方からの巻き返しを図るマシンが……いや、北嶋だっ。北嶋も入ってきた！

これが起死回生の策となるのか、残り7週に全てを賭けてタイヤ交換に臨むっ！』

『スタンダードウエットのタイヤですね。ある程度の雨を予想してのチョイスでしょう。他のチームは、カッツスリックが主流のようですね』

ウエットコンディションを走るためのレインタイヤというのは、素材からして違っている。それは路面温度がドライとウエットでは大きく違うため、低い温度でも十分な摩擦を得られる仕様になっているためである。すなわちドライタイヤで濡れた路面を走ると全くグリップを得られず、逆にレインタイヤで乾いた路面を走ると著しく磨耗してしまうという事態に陥ることとなる。もちろん、その両方の中間を選ぶことも可能だが、それではどちらでもタイムが伸びない。速く走ることを目的としたレースにおいて、万能は必ずしも優秀ではないのだ。

ちなみにカッツスリックというのは水捌け用の溝を彫り込んだドライタイヤのことを指し、レインタイヤとは厳密に言えば違う。よリドライに近い、乾きかけの路面や所々濡れた程度の環境に適應するタイヤであり、基本的な性質はドライに近い。一部にウエット区間を有するモナコでは、ほとんどのマシンが装着していた。

「さて、これが英断と出るかどうか」

見守るだけでジツトリと汗をかいている監督の富田が、眉間に深い皺を刻んで重苦しい呟きを漏らす。同じようにモニターを睨み付けている女性陣二人も、祈るような面持ちでシートに座っていた。

『北嶋。ピットアウト。順位は……8位でしょうか。しばらくはタイヤ交換によって混乱するでしょうから、まだわかりません』

『雨が降り始めたとは言え、まだドライの区間もありますからね。』

どちらのタイヤがラップタイム的に有利なのかは、実際に走ってみないとわかりません。ただ、シユマツクに前を押さえられるような形になっていましたし、タイヤ的にも苦しんでいましたからね。北嶋としては賭けに出た形でしょう」

同時にピットインを行った場合、よほどの偶発的なトラブルでも起こらない限り、ピット作業で順位を逆転することは難しい。しかしそのタイミングをずらし、シユマツクが入るまでの周回数でラップタイムを稼ぐことによって、順位を変動させることは可能だ。F1から続く伝統のピット戦略というヤツである。

『ラップタイム的には、まだドライの方が優位でしょうかね？』

『全体としてはその傾向が見られますね。ただ、ケメルストレートを中心としたセクター1は完全なウエットコンディションです。直線に強いマシンは早々に履き替えておくのが正解かもしれませんがね』
『そういう点ではフォーチュンベルの選択は正しかったと言えるのかもしれません。しかしそれでも、全体としてはドライがまだ優位です。この状況でタイムを縮められるのか。それとも開いてしまふのかあ！』

『セクター2通過のタイムは、あまり伸びていませんね。むしろ差が開いています』

『とここで、先頭のハミルがピットに入ってきた。シユマツクは…
…来た来た来たあ！ シユマツクも続いてピットイン。すぐ後ろを走っていた2台、サリスとマイオールも続けてピットインです。さあ、この1周の差がどう出るのか。まずはハミルがピットアウト、約5秒遅れる形で3台が続きます』

『ハミルとシユマツクの差がずいぶん詰まっていますね。コースアウトやスピンはなかったようですが、やはりウエットコンディションが急速に広がっているのかもしれない。ハミルは相当慎重にマシンを運んできたのでしょうか』

『その慎重さが吉と出るか凶と出るか。ハミルのラップタイムは…
…シユマツクのタイムに比べて5秒以上遅れています。そして問題

は、北嶋との位置関係だぞっ！」

一足先にコース上へと復帰したハミルが加速を開始する。それほどほぼ同時にピット作業を終えた3台のマシンが、ピットロードへと車体をスライドさせた。入ってきた時と、その差は全く変わっていない。まるで鎖で繋がれているかのように、3台が数珠繋ぎになつて走行していた。この3台に割り込んで入ることは、見た目からして不可能に近い。3台を一度に抜き去るか、それとも3台の後方に付くか、二つに一つしかないように見えた。

「北嶋がたつた今バスストップシケインを抜けてくるっ。カブトガニの加速はここからだっ。しかしシユマックがピットロードを出るぞっ。駄目かつ。駄目なのかあ！」

黒いマシンの急加速も、連なつた3台を捉えるには至らない。

「やはり1周の差が出ましたね。もう少しウエット寄りの路面状況であつたなら、あるいは逆転していたかもしれないませんが、これは苦しいチャレンジでした」

「厳しいっ。北嶋は二つ順位を落として5位、残るは僅かに6周のみですっ。泣いても笑つてもこれでシーズンが終わりますっ。勝利の女神は北嶋を見放したのかあ！」

思わず立ち上がった朱里に追隨するように、傍観者にしかたない三人がモニターの前で立ち尽くす。もはや座っていることすら出来ないほどに、気持ちが悪つていた。少なくとも、落ち着いていることなど出来る状況にない。

「私、ガレージに行つてきます！」

「あ、ちよつと朱里ちゃん！」

クルーの邪魔になつてはと注意しようとした高千穂の肩を、富田が優しく叩く。ここまでくれば邪魔にもならないことは事実だが、それ以上に彼女の逸る気持ちを大人らしい理性で押さえ込みたくなかつたのかもしれない。

残された二人は、朱里の出て行つた扉を眩しそうに見詰めていた。

思っていたよりもショックは少なかった、そう分析している自分が居ることに、彼は少なからず驚いていた。残す周回数は極僅か、トップを走るハミルまでのタイム差は10秒ないが、その間に3台のマシンが挟まっている。決して、楽観できるような局面ではない。(確かに5位だけど)

現実に対する落胆は全くない。むしろ何か、とてつもなく恵まれた境遇の中に居るかのような、果てしない高揚が全身を支配していた。激しいポイント争い、しかも近年稀に見る最終戦での決戦だ。その中を、主役の一人としてサーキットを駆け抜けている。もちろん今でも勝つつもりでいるし、諦めるなどあり得ない。しかし心のどこかで、勝ち負け以外の価値を見出している自分が居ることも自覚していた。

(去年の今頃は、どうだっただろう……)

レースという競技から離れても、F1を見ることは辞められなかった。それは未練というより、単純にレースという舞台が好きだったからに違いない。そしてもしも、一人の傍観者としてこのレースを見ていたならば、モニターの前で手に汗を握り、この熱く激しい展開を堪能していただろうと確信する。ポイントランキング上位者が意地を張り合い、最後まで残った拳句にスパウエザーという最高の演出を得ているのだ。これで興奮しないなど、レースを観ている意味がないというものだ。

(けど、この分だと来年は見られないな)

大きく左にハンドルを切り、螺旋の最下層にある鋭角のコーナーを曲がっていく。前を走るフランク・グランプリ　マイオールのマシンとは2秒ほどの差がある。この距離ではスリップストリームには入れない。ここから訪れる絶壁、オー・ルージュからケメルストリートという直線区間で追い抜くことは、この状況では難しいところだ。

まるで天を衝くような上り坂を辿り、細かく左右に切って視界を

開く。一瞬浮き上がるような錯覚が通り過ぎた後、果てしなく伸びているような直線が眼前に広がった。マイオールとの差は大きく変わらない。雨が降り、好機を活かせなかった結果としての5位が、現実として視界を覆う。本来なら舌打ちと共に踏み込むべきアクセルが、この瞬間は不思議なほど軽く感じられた。

（やっぱり、この楽しさはやらなきや味わえん）

ヘルメットの中で、口元が吊り上る。不利としか表現のしようのない状況にもかかわらず、今この場に居ることを誰よりも感謝したいと思っているのは、間違いなく彼　北嶋だった。

こんなに楽しい現在が待っているなど、過去の彼は想像することも出来なかった。そして恐らく、現在の延長に居る彼は、過去の姿に戻るなど出来ないだろう。レースを他人事として傍観するなど、絶対に不可能だ。この楽しみを味わってしまった彼に、映像で満足出来る道理など微塵もない。人の欲の深さを、今の彼は改めて噛み締めていた。

「あーくそつ、楽しいぜ！」

叫ぶように声を発し、叩き付ける雨粒を弾いて加速を続ける。路面はウエット、天候は土砂降りの一歩手前という様相だ。直線ですら、マシンが拳動を乱さないかと神経を張り詰める必要があるほどである。しかもそんな状況下で、4台のマシンが互いの動きを牽制し合い、隙あらば抜こうと画策しているのだ。常人からすれば、精神が異常な領域に達していると思えないだろう。

人が高いレベルの集中力を発揮する時、世界を覆う時間という規則性に揺らぎが生ずる。微細な変化は手に取るほど明確に認識し、何もかもが美しく映る。雨の一粒すら例外ではない。

4台の中で先頭を走るシュマツクが、イン側に入られないギリギリのラインでブロックする。その背後にサリスがピタリと張り付き、空いたベストラインにマイオールがマシンを置いた。それぞれの意志と拳動を即座に察知した北嶋はコースの丁度真ん中に陣取り、ラインを変えて立ち上がりでの勝負をかける。表示されているタイム

を見るまでもない。このケメルストレートを走り切った瞬間、状況が変化していることは即座にわかった。何もかもが、絶望へと向かっているワケではないのだ。勝利の女神は、必ずチャンスを残してくれている。問題は、そのチャンスを見極める目と掴み取る腕を有しているかどうかだった。

シユマツクがコーナーへと入る。十分な減速とハンドリングが見て取れる。そして背後にピタリとついたサリスが続いて減速を開始し、2台の距離が詰まっていく。

この瞬間、北嶋は大きくブレーキを踏んだ。

本来の計画からすれば、まだタイミングは早い。しかし彼は、何かを察知してブレーキを踏み込んだ。それは恐らく、カメラで捉えた映像を見ていても全く感じ取ることが出来ないほどの、微細な違和感であったに違いない。しかし彼は、サリスのブレーキタイミングが遅いことを、僅か数センチの挙動から判断したのである。

白地に鮮やかなマリンスブルーの魚がデザインされたマシンのフロントウイングが、深紅のマシンのリアウイングを引っ掛けるようにしてスライドしていく。流れるようにアウトへと逸れていく2台のマシンを避けるように、白地に青いストライプの入ったマシンを駆るマイオールが、強引にハンドルを切ってイン側へと逃れてくる。もしも北嶋がブレーキを踏んで急制動をかけていなかったなら、重くなったライン上でマイオールと激突していたに違いない。もつれるように砂地へと離れて行く2台のマシンと共に、この場から動くことが出来なくなっていた可能性すらあった。

『な、何があつた!?!』

突然の急ブレーキと状況変化にデータがついてこられないのか、ツクモから確認の催促が入る。さすがに見えない中での激変は、いつも冷静なツクモですら不安にさせるようだ。

「シユマツクにサリスが追突した。多分2台ともウイングをやつてる。脱落したよ」

『お前は……大丈夫なようだな』

モニター上でチェックしたのだろう。声に安堵が宿る。

「少しばかり強くブレーキは踏んだけどな。とりあえず問題ない」

『これで、残るはマイオールとハミルだけか』

「大丈夫だ。すぐに抜く」

今の彼には見える以外のものが見える。自分のマシンばかりではない。相手のマシンの状態や挙動まで、手に取るように見えていた。そして今、彼は確信したのだ。

自分のマシンが、他の誰よりも速いことを。

ツクモはタイヤ交換のタイミングが間違っていたとは思っていない。他の3台に比べて、北嶋の駆るカブトガニには余裕がなかった。特にタイヤの状態は最悪だ。もしあのままもう1周走らせていたら途中でスピンしていた可能性も低くはない。しかしそれでも、仮定や結果に絶対はなく、より状況を好転させる策が存在しなかったとは言いい切れない。

彼の仕事にベストはない。あるのは優れたベターと、最悪でないベターだけだ。だからどのような選択も、常に相応のデメリットを抱えることになる。今回、早めにレインタイヤに交換した結果、余計に磨耗させることになってしまった。その分水捌け用の溝は浅くなり、ウエットコンディションが更に進んだ場合、他の4台に比べてハイドロプレーニング現象の起きる確率が上がることになる。逆に言えば、雨の状態が弱まる方向に推移すれば、路面との相性が向上する可能性もある。こればかりは運だ。いかに正確性を増した気象予報システムであっても、天候そのものをコントロールすることは出来ない。そして何より、下した決定を巻き戻して覆すなど、神ならざる彼には不可能な話だった。判断し、決定し、送り出した以上、あとはマシンと北嶋を信じるより他にないのだ。無論、だからこそ心苦しくもある。

「改めて言うが、異常は出ていない。思い切り走れ、北嶋」

残りは5周余り、トップを走るハミルとは10秒を切っている。これまでの紆余曲折を思えば、よくここまで辿り着いたと喝采して然るべき状況だ。しかしそれでも、銀河チャンピオンになれるかどうかで、評価は大きく変わってくる。ここまでの努力を無駄にしないためにも、ハミルを追い抜く必要があった。

(そのためにはまずマイオールだが……)

マイオールの駆るフランク・グランプリのマシンは、特別大きく特徴を有するマシンではない。可変ウイングの先駆けと言われたのも、最早ずいぶん懐かしい話となりつつある。現在はバランスの取れたオーソドックスなマシンとして認識されている。それ故に欠点がなく、特にマイオールのようなベテランがシートに座ると、粘りのある厄介な相手へと変貌する。今期のマイオールは優勝こそ一度しかないが、完走率は極めて高い。積み重ねてきたポイントは伊達ではないと、隙のない走りが主張しているかのようだ。

オフロード区間を抜け、2台のマシンは揃って大きく左へ旋回している高速コーナーへと突入する。激しくも大きな水飛沫が上がり、それだけで視界が一杯になる様が、画面の隅に小さく映っている車載カメラの映像からも窺える。この、何一つ前が見えないような状況下で北嶋はアクセルを踏み込み、マイオールを追わなければならない。もちろん光学カメラ以外のセンサーも積んでいるので、完全な盲目状態で走ることはないが、時速300キロを超えるレベルに加速しつつコーナーを立ち上がっていくのは、常人からすれば狂気の沙汰でしかないだろう。

(あれ、差が……縮まっている?)

高速区間は元々得意とするカプトガニではあったが、それでも上位を相手に簡単に差を縮められるほど大きな差はない。しかし今、オフロード区間を抜けてからシケインが出るまでの間に、マイオールとの差は明確に縮まっていた。例の事故があり、不得意なオフロードの中低速区間で若干開いた差を、一気に縮めたような印象だ。改めてタイムを確認すると、数字上にも表れていた。トップとの

差は8・2秒、2位マイオールとの差は0・5秒にまで詰まっている。完全なウエットコンディションにレインタイヤと条件はすでに五分、逆に言えばこちらが有利になる理由は見当たらない。強いて言えば、雨が降るといふ状況がフォーチュンベルにとって相性が良かったといふところだろうか。

（いや、相性だけなら北嶋一人が速い理由にはならないな。何かある。そしてそれを、北嶋は感じていたのか？）

前を窺うように牽制しながら螺旋へ突入していくカブトガニの様子をモニター上の光点で確認しながら、その差が更に詰まっていることを認識する。間違はなく、北嶋のペースがマイオールのそれを上回っている。抜くチャンスさえあれば、いつでも抜けるような差に見えた。

北嶋はツクモに『大丈夫』と言っていた。あの時の北嶋は気味が悪いほど落ち着いていて、それがかえって常軌を逸しているように感じられた。もしかしたらすでに諦めていて、口先だけでそんな強がりと言ったのではないか、そんな風に疑いたくもなかった。しかし同時に、何かを期待させるような凄みが潜んでいたことも無視は出来ない。彼にしか見えない、あるいは感じられない何かがあつて、だからこそあの言葉へ繋がったのだとすれば、ここで彼が希望を捨てるワケにはいかなかった。

（だが、抜くと言つてもどこで抜く？ この上り区間がエンジンで頭打ちになるとしたら、あとはバスタップシケインくらいしか

）

糸口を探そうと思考を巡らせ始めた矢先、思つてもいかなかった事態に頭の回転が止まる。彼らにとっては文字通り嘆きの壁、天へ向かって伸びるオー・ルージュにおいて、マイオールとの差を更に縮めたのである。それはまさしくテールトゥノーズ、火花が散るほどの接近戦だ。だが今は雨中決戦、火花の代わりに水飛沫が舞い上がっていることだろう。無機的なポジション表示しか示さない画面からは現場の熱さも酷さも伝わってはこないが、間違はなく視界ゼロ

の状態で戦っている筈である。

オー・ルージユを駆け上がった2台のマシンは、スリップストリームという状態を形作る間もなく横に並び、そのまま強引にカブトガニがオーバーテイクしていく。ケメルストレートにおける最高速は、オー・ルージユをどれだけ高速で抜けたのかに由来する部分が大いなので、追いつけてきた北嶋のマシンが伸びるのは理解出来なくもない。しかしそれでも、エンジンの非力にあれば悩まされ、実際に追いつけられてすらいたマシンが、環境が変わったからといって直線の伸びを取り戻すというのも不可解だった。まるで何か、性能とは別の何かが作用しているのではないかと、怪奇現象の一つでも想定したくなるほどの激変である。

（雨が降って何か……雨？）

ツクモが思わず立ち上がる。

「そうかつ、雨が！」

環境が変わり、カブトガニの直線スピードが伸びたというのは間違いである。エンジンの性能に変化はないし、ラップタイムには伸びていない。ウエットコンディションになって路面状況が変わり、摩擦係数に変化が起きているものの、それはフォーチュンベルに限った話ではない。全てのマシンが同じ条件で走っている。ただ、降っている雨に関しては、同じ条件であるとは言えなかった。

直線での伸びは、もちろん様々な要素が絡み合って生まれるものであるが、エンジンによる推進力が各種抵抗力によってどの程度削られるかによって決まってくる。抵抗は主に空気抵抗とタイヤによる摩擦抵抗が影響を及ぼすが、タイヤによる抵抗は共通項も多く大差がない。そのため空気抵抗の有無が直線スピードの速度を決する極めて重要な要素となるのである。以前にも述べたが、カブトガニにはウイングがない。慣性制御を利用してダウンフォースを得るといふ仕様のため、ウイングを取り払ったからである。そのため直線では空気抵抗が低くなり、結果として最高速を伸ばすことに成功しているのである。ところがこのオー・ルージユからケメルストレート

トに至る直線区間は勾配のきつい上りであるため、エンジンが悲鳴を上げて思うような伸びを得ることが出来なかったのだ。しかし今、マイールを軽々と抜いていく北嶋に、数周前のもたつきは感じられない。それは何故か。

推進力に変化がないとするなら、答えは簡単である。抵抗力が変化したからだ。空気抵抗に雨粒による抵抗が加わり、それが総合的な抵抗力へと取って代わる。一粒一粒は大した力を持たずとも、それが束を為してウイングを直撃するのである。ウイングの有無はそれだけ大きな差を生むことになり、結果としてウイングの有るマシンと無いマシンでは差が生ずることになる。微細ではあるが、抵抗の無さを売りにしたマシンだからこそ、得られたメリットなのである。

ちなみに、もしもこのコースがモナコのような中低速サーキットであつたなら、この状況は大してプラスに働いていない。ストレートでの速度よりコーナーでの速度が重要となるコースでは、路面の状態に対する相性の方が大きく影響したであろう。何もかも、今という時間と場面が揃わなければ起こり得なかった偶然だった。

「北嶋よ」

インカムに触れ、穏やかな声で呼びかける。

「どうした？」

「スパはお前を歓迎しているようだ。最後まで走って、精一杯の祝福を受けてこい」

「……ああ、そのつもりだ」

今この瞬間、ツクモは自らの役割が終わったことを実感した。残り4周半、ハミルとのタイム差は7秒フラット。追いつけるかどうかすら微妙な局面だ。しかし、希望を捨てる気には到底なれなかった。勝てると、勝ってくれようと明確な根拠も無く信じられるなど、ツクモにとってはオカルトそのものである。

彼はモニターから離れ、雨の中に身を乗り出す。

メインスタンド前を立ち上がり、大歓声の中でチェッカーを受け

る相棒を、その双眸で直接受け止めるために。

第9話 チャンピオンロード

残り2周を切っても、北嶋に焦りは無かった。

雨が降り始めてから、状況が一変したせいだ。

オー・ルージュを駆け上り、ケメルストレートを突き進む。周回遅れのマシンが巻き上げる派手な水飛沫を切り裂いて、その先に見える赤い光を追いかける。1位との差は3・2秒、まだ抜けるほどの距離ではないが、ハミルの視界には迫り来るカプトガニが映っている筈だ。凌げばハミルの、抜けば北嶋の銀河チャンピオンが決まることになる。まさしく人生を賭けた大勝負である。

(あと一周半というところか)

本来、この時点で前に出ていないのは極めて不利な状況である。

少なくとも、背後にピタリと張り付いているくらいでないで、逆転劇など期待出来よう筈もない。しかし今、北嶋は自分でも不思議なほど落ち着いていた。しかも諦観しているのではない。このまま行けば勝てる、確信すらしていたのだ。

確かに、カプトガニが雨天において強いマシンであることは過去の例から判明している。雨という不確定要素が空気の流れを乱し、空力によってダウンフォースを得ようというマシンにとっては難しい局面となる。反面カプトガニは、単純に路面状況の違いのみが問題となるだけで、ダウンフォースそのものには大きな影響が無い。しかもここで問題となる路面状況は、全てのマシンが平等に受けるものだ。差異を考える上では考慮に入れる必要すらない。結果、直線での伸びにこれほど差が出るとは思っていなかったものの、それ以外は予想していた通り、雨が降り始めてからの安定感は完全に頭一つ抜け出ているような状況だった。

(アンダー気味だな。ダウンフォースが足りてないのか?)

オフロード区間に突入し、差が縮まらなくなつたものの、やはり北嶋の表情に焦りの色はない。冷静に現状、ハミルのマシンにア

ンダーステア傾向が出ていることを考慮し、頭の中で先々の展開を再構築する。

(それでもまだ、ケメルでは無理か)

どこまでも、北嶋は冷静だ。

いや、それは単純に冷静というよりも、すでに確定した事実を確認しているかのようにすら見える。結末のわかつている推理ドラマを見直しているかのような、そんな素振りにすら思えるほどだ。

時折ではあるが、彼はこういった状態に入ることがある。

今年の初戦、無警戒のダークホースとして勝利を果たし、2戦目は『まぐれは二度続かない』と囁かれた中での勝利だった。この二つはいずれもカブトガニの特異な性能による勝利だったと、少なくとも北嶋は思っている。しかし3戦目は、それまでと少しばかり様子が違っていた。警戒され、包囲されての第3戦、レース展開は想定されていた通りに厳しいものになった。しかし北嶋は、このレースで結果的に優勝を果たす。圧倒的な差を開いてトップを快走していたシユマツクのマシンにトラブルが発生したという運の要素は少なからずあったものの、それだけで優勝できるほど甘い状況ではなかった。この時彼は、久しぶりにこの状態へと移行したのである。

普段の生活では決して到達することの出来ないレベルの反応と判断力、それはレーシングスクールに通っていた頃に何度か経験したことがあるという、偶然の産物だった。彼自身はこれを『覚醒』と呼んでいる。経験的に高いレベルの緊張と意欲が重なった時に起こると認識しているが、好きなタイミングで覚醒状態に移行することは出来ない。入ったらラッキーというのが、北嶋の基本的なスタンスである。

そして何より重要なのは、こうなった北嶋に見えた事象は、その全てが事実になっているという実績である。抜けると思えるなら抜けるし、優勝出来ると思えば優勝出来る。そこに希望的観測や無理な願望は存在しない。在るものだけが、在るように見えるという感覚でしかなかった。

この時の北嶋を、もしも事情を知らない他人が垣間見ることが出来たとしたら、とてつもなく冷酷で自信に満ち溢れた人物であると感じるだろう。あるいは、人間というよりアンドロイドに近いと思われるかもしれない。

(あと2.2秒)

大きな左コーナー、ブランシモンで一秒近く縮めたカブトガニがバーストップシケインで銀色のマシンに接近する。低速コーナーに入ると、2台の間隔は無いに等しいようにも感じられた。何かあれば、それが些細なミスであっても、簡単に順位が入れ替わるほどの状況である。

(さすがに追いついた程度では慌てないか)

メインスタンド前を立ち上がり、いよいよファイナルラップへと突入する。泣いても笑っても、これが最後の1周だ。そしてもちろん、泣くつもりなどあるう筈もない。

ストレートを抜けて螺旋の下り区間へ突入する2台のマシンには、微細なブレすら見られない。後方を走る北嶋は覚醒しているため、自身に驚きはないものの、その前を走るハミルのドライビングに全く隙が見られない事実には舌を巻いていた。スクール時代のハミルは、速いが詰め甘いドライバーという印象だった。単独で走ると北嶋を上回るものの、レースで張り合うと抜かれてしまうというイメージを持たれていた。予選のハミル、本戦の北嶋などと呼ばれたのも懐かしい思い出である。

あれから、北嶋が父親の死を切欠にレースという娯楽から離れて五年以上、アルバイトで小さなマシンを操る程度だった北嶋と違い、ハミルは常に上のカテゴリーを目指して走り続けてきた。昔とは違うのも当然の話だろう。

(伊達じゃない、か。だがっ！)

今の北嶋は平時の北嶋ではない。そして何より状況が北嶋に味方している。不利な立ち位置であると認めても尚、このレースに敗れる気は全く起こらなかった。

螺旋の奥にある小さなカーブを曲がった瞬間、壁に向けての加速が開始される。どちらもストレートスピードに自信のあるマシンだ。10周前だったなら良い勝負をするのがやっとだっただろうし、そもそも差を詰めることすら困難だったであろう。しかし現在、その差は歴然としたものへ変じつつある。

最後のオー・ルージュを駆け上がり、時速300キロを超えるスピードでケメルストレートへと突入する。2台の差は1.7秒、スリップストリームに入るには少し足りない。しかしそれでも、カプトガニの伸びは完全にハミルのマシンを凌駕していた。見る見る差が縮まって行き、尖って見えるノーズがリアウイングの足元を捉えると思えた瞬間、その挙動が劇的に変化する。

進路を塞ぐようにブロックしてきたのだ。

(当然だな。ならば)

イン側を押さえているハミルのマシンから逃れるように、アウト側へとマシンを振る。重力制御を操作し、最大のダウンフォースを得られるように設定した。ブレーキ勝負に出るつもりのものである。

そもそも、コーナーの入口でアウトから抜くというのは難しい。F1における基本的なコーナーリングはアウトインアウトがセオリーであり、レコードラインはむしろアウト側にある。しかし抜くという状況になると、イン側を押さえている方が圧倒的に優位となる。この優位を引つ繰り返すためには、相手より大幅にブレーキタイミングを遅らせて前に出た上で、コーナーのイン側を先に押さえる必要がある。もちろん、そんな理屈は抜かれる側も承知している。そのため、よりギリギリの速度でコーナーに飛び込むことが必要とされるのである。そういった踏ん張りの利かないマシン、性能であれトラブルであれ、より早めに速度を落とさなければ曲がれないマシンは抜かれやすいということになる。

コーナーが迫り、まずはハミルがブレーキをかける。予想していた通りの位置だ。この瞬間に生じた速度差が北嶋のマシンを前へと押し進める。そして三分の二ほど前に出たところで、北嶋が遅れて

急ブレーキを踏んだ。そのままイン側に向けて鼻先を差し込んでいく。

(ちっ！)

そこへ、僅かに遅れて到着したハミルの鼻先が割り込んできた。多少は慌てているのだろう。若干のオーバースピードである。そのせいでアウトへと膨らんでいき、北嶋を押し出すように寄せてくる。それはあまりに危険な、強引極まりないドライビングではあったものの、北嶋の反応速度は突発的なオーバースピードを許容し、冷静な判断力はハミルの焦りすら計算の内だった。

2台は並ぶようにしてコーナーを抜け、イン側に陣取ったハミルが辛うじてポジションをキープした。テールトゥノーズの状態を維持したまま、オフロード区間へと突き進んでいく。差は全く無いに等しく、0.5秒以内から離れない。だがそれでも、二人の順位は相変わらず変わっていないかった。どれほど走りで優位に立っていても、実際に抜けなければ意味はないのだ。

(これで良い)

それでも、いやだからこそ北嶋は思う。ケメルで追いつき、しかし抜けない。この絶妙としか言いようのない状況を、彼はすでに予測していた。自らの捉えた真実が真に正しいものであると、今この瞬間に確信したのである。そしてそれは次の真実、ブランシモンでのオーバートイクを導くものでもあるのだ。

本来苦手としている中低速のオフロード区間すら、今の北嶋には障害にならない。ハミルの背後にピタリと張り付いたまま、滑るようにして抜けていく。ここで抜けないのは道幅が狭いからだとも言わんばかりの走りだった。

そしていよいよ、オフロード区間の終わりが訪れる。左へ折れるスタブローコーナーを抜けると、高速コーナーブランシモンが視界に飛び込んできた。目前には曇天で尚輝きを失わない銀色のマシンがいる。距離はほぼゼロ、完全なスリップストリームに捉えていた。ブレーキの長さから立ち上がりのタイミングまで完璧にこなした北

嶋は、満を持してアクセルペダルを踏み込んでいく。

そして転機はすぐに訪れた。

雨の中、ハミルの駆るデニス・レーシングのマシンが最高速に達した瞬間、北嶋は鼻先をイン側へ振ってから即座にアウト側へと進路を切る。一瞬の虚をつかれる形となったハミルは、足元の不安定さも手伝って対処し切れず、ブロックが外れてしまった。高速コーナーのアウト側から並走してくる白いマシンと懸命に張り合うものの、その速度差は歴然とし過ぎていた。コーナーの半径を半ばほど過ぎた所で完全に順位は逆転し、ハミルは仕方なくテールを拝むことになる。

この瞬間全てが完結した、誰もがそう思った。

当の北嶋でさえ、その事実を疑わなかった。

しかしそれは不意に、かつ最悪のタイミングで訪れる。

「なっ！」

ブレーキを踏み込んだ瞬間、その違和感に気付いた。想定していた景色と実際の光景が乖離し、何もかもが崩れていく。スピードを落とし切れなかったマシンはバスタップシケインを直進し、縁石を跨いでコースを外れる。慌てたようにハンドルを切って急旋回するものの、ハミルのマシンはすでにシケインを抜けるところだった。見えなくとも良い、むしろ見えて欲しくない二人の差を、相変わらず覚醒した意識が冷静に把握していく。離れていく銀色のマシンが、地鳴りのような歓声を浴びていた。

北嶋は、自らの敗北を悟る。誰よりも真実の姿が見える今の彼には、誰よりも正確に敗北の姿が映っていた。すでに走る意味はない。勝ちは無くなった。それが事実だった。

『諦めんなっ、さっちゃん！』

ハンドルから手を離そうと力を抜きかけたところで、張り手のような声が耳に届く。それは精一杯の叫びと、願いと、望みだった。

(やべー、もう終わったつもりでいたぜ)

情けない自分に対する叱責からか、奥歯の擦れる音が耳の奥に木

霊する。それが意識を引き戻したのか、雨靄の向こうに遠ざかりかけていた景色が、甲高いエンジン音と共に戻ってきた。

アクセルを踏み込み、体勢を整えながらシケインへと復帰する。ブレイキの不調は変わらないが、マシンをゴールまで導くのに支障はない。何より3位を走っているマイオールのマシンが迫っていたのんびりと現状分析しているだけの時間的余裕はない。

マイオールがシケインへ突入する寸前に復帰した北嶋は、強引なブロックでインを死守した後、ホームスタンド前に走り出るなり自慢の加速を開始した。

白と黒、伝統的なゴールの象徴であるチェッカーフラッグが、カブトガニの通過と共にはためく。

こうして北嶋は、最終戦を走り終えたのである。

月が翳る。

海と違い、モナコの空は静かな光に満ちている。今の北嶋にとつては、海上で点々と輝くクルーザーの内側にある人々の温もりよりも、一見ひしめき合っているように見えて孤高の存在の集合体である夜空の方が、より相応しいように感じていた。

レースが終わり、F1という大きなイベントが終わって、すでに数時間が経過している。直後はマスコミの質問攻めが鬱陶しくも感じられたが、その興味が銀河チャンピオンヘシフトするなり、夏を終えた海水浴場のように人の姿が消えていった。元々マスコミを好まない彼としては、むしろ静かで良いと素直に思える反面、どこかで現実を突きつけられているような痛みを感じてもいる。

総合ポイントランキング2位という成績は誇るべきものだ。チーム状況、彼の経歴と実績、経験や年齢、そういったものを考慮すれば更に評価は跳ね上がるだろう。しかしそれでも、銀河チャンピオンに届かなかったという事実には変わりがない。

彼は視線を落とし、自らの右手を見詰める。グッと握り、そして

ゆっくりと開いた。彼はまだ走ることが出来る、いや走りたいと思
っている。やり残したことはなかったかと自問自答をしてみるが、
何も思い付くことは出来なかった。そもそも、心配するピットクル
ー達を尻目に、誰よりも今回のレースに満足していたのは北嶋であ
ったと言える。結果こそ2位だったものの、出来るパフォーマンス
の限界まで迫ったと自負していた。それで2位だったのなら仕方が
ないと、そう思えるほどのレースだった。

楽しかったし、満足もしている。

ただ、これは彼自身も不思議なのだが、誰よりも納得している筈
のレースなのに、他人に誉められたり慰められたりするのとは、とて
も不快だった。それが善意からの、あるいは真意からの発言である
とわかっていても、聞く気になれなかった。

「ああ、わかってんだ、本当は……」

呟き、噛み締めた奥歯が鈍い音を発する。

悔しいのだ。腹の底から、事実に対して憤っているのだ。恐らく
これからのだろう。心臓に針を一本一本刺していくかのように、
チクリチクリと悔しさが込み上げるのは。もちろん、悔しい思いは
始めてというワケでもない。今期のレースにだって、悔しいリタイ
アは何度もあった。だがそれは、一晩寝て起きれば忘れられる程度
の感情に過ぎなかったと思ひ知る。今の彼は、とても眠れるような
気がしなかった。

と、不意に通りがかった乗用車が、軽快なエンジン音を響かせて
背後を通り過ぎる。一般的な乗用車はモーター駆動が主流だ。レー
スカーならともかく、エンジンを積んだ乗用車などマニア向けの代
物である。大きなイベントの直後ということで、火の点いた愛好者
がレースを気取っているのだろう。取るに足らない、さほど注目す
べき出来事でもない。

しかし今、北嶋の心臓は早鐘のように打ち鳴らされ、呼吸のペー
スすら乱れ始めていた。何かスイッチでも入ったかのように、物の
輪郭が鋭利に見えてくる。感覚が研ぎ澄まされていく経過が、手に

取るようにわかった。

「くそっ！」

制御出来ない自分の感性に驚き、齒噛みし、額に手を当てて声を発する。頭ではわかってはいるのに、身体は未だにハンドルを欲していることが、たまらなく苛立たしかった。誤魔化してなどいないと信じる自分が、まるで全てを誤魔化すために嘘を吐いていると主張しているかのようで、どこまでも不快だった。

「オレだって優勝したかったさっ。チャンピオンにだってなりたかった。だが、今日のレースはオレの精一杯だっ。満足してる。それは嘘じゃない。嘘じゃないんだ！」

「ああ、良いレースだった」

慌てて振り返ると、そこには金髪の青年が歩いていた。車も人も見当たらない灰色の大地を、白線を横切るようにして悠々と踏み締めてくる。北嶋は嫌なところを見られたと言わんばかりのバツの悪そうな顔で鼻の頭を掻きつつ、青年の到着を待った。

「立ち聞きとは趣味が悪いな」

そして目の前で笑っている青年に、苦しい文句を言い放つ。

「あれだけ大声で叫んだら、パーティ会場にだって聞こえてるさ」

「んなわけあるかっ。どんだけ離れてると思ってるんだ」

「五分くらいは歩いたね」

公式の祝宴が、今もまだ続いている。基本的なセレモニーはすでに終了しているが、皆どこかシーズンの終了を惜しむかのように会場から離れない。これもまた一つの風物詩とも言えた。もちろん、一方で北嶋のように抜け出る輩も居るし、咎められることはない。F1で戦う動機が人によって違うように、その終わり方も人それぞれなのだ。

「で、何か用か？」

「ああ、主役が居ないと締まらないからな」

「主役って……ハミルがいりゃ十分だろうに」

呆れたように言い放つ北嶋の表情には、中途半端としか表現のし

ようなない笑顔が張り付いている。友人の勝利と栄光を祝福し認めながらも、それと相反する気持ちを持って余し、戸惑っているかのような顔付きだ。

そんな複雑な顔をする相棒に向けて、やれやれとばかりにツクモは溜め息を吐く。

「何かムカつくぞ」

「公式なんてどうでも良いんだよ。お前を呼びに来たのは、残念会へのお誘いのためだ」

「残念会だあ？」

ストリート過ぎて皮肉すら感じ取れない祝宴に、さすがの北嶋も面食らう。こうまで直球だと、慰めようとか思っているのかすら疑問に思えるほどだ。同情など真つ平ゴメンな彼だが、だからといって全く気を遣われないというのも淋しいものである。

「主催のお嬢様が乗り気なんだ。朝まで盛大に騒ぐと今から気合を入れてるよ。お前が来てくれないと始められないと言うし、何より彼女の相手はお前じゃないとな」

「それ、厄介者を押し付けようとしてるだろ？」

「否定はしないがね。でもまあ」

漆黒の天を見上げ、再び姿を現した弓張り月を眺めつつ笑顔が曇る。

「居なくなつたお前を心配してたのも事実なんだ。とりあえず戻つて、安心させてやれ」

「……へいへい」

止むを得ずという渋々の顔を横目に見て、ツクモは微かな笑みを取り戻す。彼とて悔しい気持ちも十二分に抱えているのだ。最前線でチェッカーを受けたドライバーが悔しくない筈はない。それでも尚チームの一員でいられる北嶋を、彼は心から歓迎したかった。

「あ、そうそう」

残念会の会場に向けて歩き出し、追うようについてくる足音を確認したツクモが、首だけを巡らせて北嶋を見る。

「何だ？」

「来年も走ることを決めたらしいな。迷っていたみたいだから、安心したよ」

「迷っていたというか」

立ち止まり、海と空の境界へと視線を向ける。

「不安だったんだよ」

「不安？ あれだけの成績を上げていたのにか？」

「オレさ、親父が死んでスクールを中退した時、レースを諦めたんだ。続けても良いって婆さんには言われたんだけど、自分で蹴った。でもレースばかりやってたヤツが、いきなり普通の人生に戻ったところで、まともな学校や就職先に落ち着ける筈もなくてさ、滑り落ちるように底辺でゴロゴロしてたよ。でも仕方なかった。そういうもんだって、自分を納得させてたんだ」

「北嶋……」

妙に自虐的な北嶋の言い方が少し気になったが、ツクモはとりあえず最後まで話を聞くことにした。今日の敗北はただの敗北ではない。平時と違うのは、むしろ当然だった。

「だから、いきなりこんな舞台に引き上げられて、正直言つと戸惑いはあった。本当に良いのかって、ドライバーという職業をすることがオレに出来るのかって、そう思ってたんだ。それが蓋を開けてみたら、まさかのチャンピオン争いだろ。夢なんじゃないかって思ったことも一度や二度じゃない」

「だが、夢じゃない」

「ああ、わかってる。いや、ついさっき、やっとわかったんだ」

「さっき？」

最終戦までの14戦は、全て夢の中だったようである。

「最後のシケインでさ、朱里の声が聞こえた時」

「あの『諦めんな』ってヤツか？」

「そう、それ。あれがなかったらきつと、オレはあの場所で止まったままりタイアして、今でもただ後悔していただけだったと思う。」

あの場所からチェッカーを受けるまで、本当に僅かな距離だったけど、自分の意志と力でマシンを運んだんだって実感したんだ。そしてあの瞬間、チャンピオンを逃したことが本当に悔しかった。と同時に欲しくなったんだ、心の底からね」

ツクモは理解する。北嶋はやつと、最終戦の土壇場になって現在の立ち位置とその先に見える未来を認識することが出来たのだろうと。今までは、その覚悟がなかったから、来年のシートを汚ってきたのだ。

その生真面目ぶりに、ツクモは笑わざるを得ない。

「お前、ずいぶん今更だよなあ？」

「笑うなよ。オレだって、今更だって思ってたんだ」

「悪い悪い」

ポンポンと肩を叩き、歩みを再開する。

「笑ったお詫びに、時給アップを進言してやるよ」

「いや待てっ。来年も時給制なのかよ！」

「しかも一気に300円アップだ」

「わあい、って喜ぶと思ったかっ！」

静かに輝く月明かりの下、二人の影が並んで歩く。

そこにあるのは単純な、そして平凡な一歩でしかない。しかし同時に、フォーチュンベルというチームの新しい門出の瞬間でもあった。終わりがあって始まりがあって、そんなことをこれから、二人は繰り返していくことになる。

「時給じゃなくなったら、銀河最速フリーターの称号がなくなるだろうに」

「そんなもん、ドブに捨ててしまえっ」

ただ今は、少しだけ切ない終焉を堪能しつつ、安堵の笑顔と共にある。

共通の願いと誓いを、胸の奥に秘めたまま。

第9話 チャンピオンロード（後書き）

何だか続くみたいなお内容ですが、これで終幕となります（笑）

完全な趣味の代物にここまでお付き合いいただき、誠にありがとうございます。
ございました。

ああ楽しかったと、ほんの少しでも思っていただけなら幸いです。
います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5514n/>

F・

2010年10月8日12時29分発行